

委員会および各部会、WG の状況 (中間とりまとめ以降)

1 委員会

(1) 中間とりまとめ以降の状況

委員会

- 5/10 : 河川管理者からの質問事項の提出 (委員会中間とりまとめ、淀川部会中間とりまとめ)
- 5/15 : 第 11 回委員会 質問内容についての意見交換
- 5/24,5/29 : 河川管理者からの質問事項の提出 (琵琶湖部会中間とりまとめ、猪名川部会中間とりまとめ)
- 6/ 6 : 第 12 回委員会 質問内容についての意見交換 (第 11 回に引き続き)
- 7/30 : 第 13 回委員会 今後の進め方等について議論
- *9/12 : 第 14 回委員会 最終提言の作成方針、素案を検討、主要論点について議論

水需要管理WG

- 7/ 2 : 第 1 回水需要管理WG 寺田委員より利水の考え方の転換ポイントについて説明
- 7/ 8 : 第 2 回水需要管理WG 河川管理者よりフルプランについて説明
- *8/ 7 : 第 3 回水需要管理WG 自治体の農政担当者より農業用水の実態について説明
- *8/19 : 第 4 回水需要管理WG WG のとりまとめ方法、水質の問題について意見交換、一般の方より情報提供。
- *9/10 : 第 5 回水需要管理WG 9/12 委員会へ提出するWG とりまとめについて意見交換
- 9/30 : 第 6 回水需要管理WG 最終提言作業部会へ提出するWG とりまとめについての意見交換

水位管理WG

- 6/26 : 第 1 回水位管理WG 今後の検討事項について議論
- 7/19 : 第 2 回水位管理WG 河川管理者より瀬田川洗堰における水位操作の現状と水位操作を行わない場合を 3 つのパターンでシミュレーションした結果の説明
- 7/23 : 第 3 回水位管理WG 河川管理者より洪水調節のルール、西野委員から「瀬田川洗堰水位操作規則の変更が琵琶湖の生態系に及ぼす影響」等について説明
- 8/ 5 : 第 4 回水位管理WG これまでのWG の検討内容について整理
- *8/23 : 第 5 回水位管理WG 西野委員、河川管理者より情報提供。これまでに収集した水位管理に関するデータや資料について意見交換
- *9/13 : 第 6 回水位管理WG 最終提言作業部会へ提出するWG とりまとめについての意見交換
- 10/ 2 : 第 7 回水位管理WG ダムと下流の問題、淀川大堰と下流について検討

ダムWG

- *8/29 : 第 1 回ダムWG WG の検討の前提、フレーム等について意見交換
- *9/19 : 第 2 回ダムWG 河川管理者よりダムの現状について情報提供

一般意見聴取WG

- *9/11 : 第 1 回意見聴取WG 今後の進め方等について検討

水質WG

9/12：第14回委員会にて設立が決定

10/1：第1回水質WG 「河川整備計画」に書き込むべき水質の目標設定、具体的な対策などについて意見交換

最終提言作業部会

9/12：第14回委員会にて、運営会議（8/27）での決定事項（最終提言を運営会議メンバーおよび各委員会WGリーダーで構成する「最終提言作業部会」が主体となって取りまとめる）が了承された。

*9/12：第1回最終提言作業部会 今後の進め方等について検討

*9/28：第2回最終提言作業部会 目次案および素案の検討

（*は6頁以降の「結果報告」あるいは「結果概要」を参照下さい）

（2）ワーキンググループ及び作業部会メンバー

現在、以下のWG、作業部会が設立されている。（* = WG専任委員）

水需要管理WG：今本委員（リーダー）、荻野委員、川上委員、宗宮委員、寺田委員、寺川委員、小尻委員*

水位管理 WG：榊屋委員（リーダー）、江頭委員、田中(哲)委員、谷田委員、西野委員、村上委員

ダム WG：池淵委員（リーダー）、今本委員、江頭委員、倉田委員、田中(真)委員、寺川委員、細川委員、本多委員、榊屋委員

一般意見聴取WG：嘉田委員、川上委員、塚本委員、仁連委員、尾藤委員、畚野委員、三田村委員、村上委員、山村委員

水質WG：宗宮委員（リーダー）、川上委員、中村委員、森下委員、矢野委員、和田委員

最終提言作業部会：今本委員（リーダー）、芦田委員長、川那部委員、寺田委員、米山委員、江頭委員、榊屋委員、池淵委員、三田村委員、宗宮委員

（3）今後の予定

10/6：第3回ダムWG

10/7：第2回一般意見聴取WG

10/10：第3回最終提言作業部会

10/14(予定)：第3回一般意見聴取WG

10/19：第2回水質WG

10/21：第4回ダムWG

10/21(予定)：第4回一般意見聴取WG

10/22：第7回水需要管理WG

10/24：第4回最終提言作業部会

11/13：拡大委員会

12/5：第15回委員会

2 琵琶湖部会

(1) 中間とりまとめ以降の状況

5/28～：河川管理者からの質問に関する委員の回答案を募集

6/4：第14回琵琶湖部会

現地視察（高時川上流部（丹生ダムサイトから源流部にかけて））

一般意見の聴取の試行（高時川流域の住民との意見聴取）

河川管理者からの質問事項への対応検討

6/17：第15回琵琶湖部会

河川管理者からの質問事項への回答・対応方向の検討

～6/28：委員から回答案を提出（欠席予定者については、必ず回答案を作成）

ワーキングの作成の是非、今後の活動内容等についても意見を募集

各委員からの回答を踏まえ、河川管理者が質問を選定し再度提出

7/4：第16回琵琶湖部会 委員と河川管理者との意見交換

*8/8：第17回琵琶湖部会 委員会WGに関する情報共有、治水に関する情報提供、今後の進め方の検討

*9/22：現地調査 丹生ダム建設予定地周辺の視察、参加者による懇談会

10/3：第18回部会 最終提言に関する意見交換

（*は6頁以降の「結果概要」「結果報告」を参照下さい）

(2) 論点別検討班（WG）の設立

第16回部会（7/4）にて一般意見聴取、反映に関する検討班（WG）を設置することが決定し、第17回部会（8/8）にてメンバーが下記のとおり決定した。また、第17回部会において、最終提言に向けて文章を調整、推敲する検討班を設置することが決定し、中村委員と中村委員が指名する1名の委員で構成することが確認された。

<一般意見聴取、反映に関する検討班 メンバー>

嘉田委員、仁連委員、三田村委員、村上委員

<最終提言に向けて文章を調整、推敲する検討班 メンバー>

中村委員、川端委員

(3) 今後の予定

11/9：第19回部会

12/14：第20回部会

3 淀川部会

(1) 中間とりまとめ以降の状況

～5/17：各委員より河川管理者の質問事項への回答案を募集

5/18：午前 論点別WG 午後 部会検討会

河川管理者からの質問事項への対応等を検討

5/27：第15回淀川部会 河川管理者との意見交換

6/16：論点別WG、部会検討会

6/24：第16回淀川部会 河川管理者との意見交換

7/2、7/15：作業部会にて河川管理者への回答、中間とりまとめの修正等を検討

*7/31：第17回淀川部会 治水の考え方について河川管理者と意見交換

*8/28：第1回現地対話集会（八幡市） 洪水防御、防災をテーマに関係者、住民との意見交換

*9/7：第2回現地対話集会（枚方市） 高水敷利用及び環境・水質・生態系をテーマに関係者、住民との意見交換

*9/20：第3回現地対話集会（京都市） 水需要管理をテーマに関係者、住民との意見交換

*9/24：第18回淀川部会 最終提言素案主要論点（治水）について、および、一般意見聴取・反映方法について議論

（*は6頁以降の「結果報告」あるいは「結果概要」を参照下さい）

(2) 論点別検討班（WG）の設立

5/11：第2回部会検討会にて、部会委員で論点別検討班を作り、以下の主要な論点を検討することを決定。

a．水需要管理・水利権：荻野委員（リーダー）、寺田部会長、原田委員、渡辺委員

b．高水敷の利用問題（本来の川らしさ）：紀平委員（リーダー）、有馬委員、塚本委員、槇村委員、榊屋部会長代理

c．洪水防御、防災（ダム問題含む）：榊屋部会長代理（リーダー）、今本委員、大手委員、小竹委員、山本委員

d．環境、水質（ダム問題含む）：川上委員（リーダー）、田中委員、谷田委員、長田委員、山岸委員、和田委員

(3) 今後の予定

9/29：第19回部会

4 猪名川部会

(1) 中間とりまとめ以降の状況

- ~6/9: 各委員より所属WGごとに河川管理者の質問事項への回答を募集
- 6/11: 第11回猪名川部会 河川管理者との意見交換
- 6/28: 論点別WG、部会検討会
河川管理者からの質問事項への対応等を検討し、主な質問に対するWGとしての回答を決定した。
- 7/11: 第12回猪名川部会 河川管理者との意見交換
WG回答をもとに意見交換を行った
- 8/2: 有志による現地フィールドワーク(実際に猪名川周辺を歩きながら流域住民に意見を伺う)
- *8/20: 第13回部会 今後の進め方、治水に関する河川管理者からの情報提供と意見交換を予定
- *9/21: 現地意見交換会 猪名川について関係者、住民との意見交換
- 10/1: 第14回猪名川部会 最終提言の主要論点に関する情報共有および意見交換

(*は6頁以降の「結果概要」「結果報告」を参照下さい)

(2) 論点別検討班(WG)の設立

- 6/11: 第11回猪名川部会終了後、部会委員で論点別検討班を作り、主要な論点を検討することを決定。
 - a. 治水: 池淵部会長代理(リーダー)、田中哲夫委員、畚野委員、(尾藤委員*)
 - b. 利水: 本多委員(リーダー)、畑委員、細川委員、森下委員、矢野委員
 - c. 利用・環境: 松本委員(リーダー)、服部委員、東山委員、米山部会長、(吉田委員*)

(*は部会長からの依頼により参加されている猪名川部会以外の委員)

- ・原則非公開とし、議論の結果等は公表する。各WGに外部の専門家を入れることも検討する。また、必要な場合には河川管理者も議論に参加いただく。

(3) 今後の予定

- 10/17: 第15回部会

委員会・各部会 結果概要、結果報告

< 委員会 >

委員会

第 14 回委員会 (2002.9.12 開催) 結果概要 (暫定版) 7

水需要管理WG

第 3 回委員会水需要管理 WG (2002.8.7 開催) 結果報告 12

第 4 回委員会水需要管理 WG (2002.8.19 開催) 結果報告 13

第 5 回委員会水需要管理 WG (2002.9.10 開催) 結果報告 14

水位管理WG

第 5 回委員会水位管理 WG (2002.8.23 開催) 結果報告 15

第 6 回委員会水位管理 WG (2002.9.13 開催) 結果報告 16

ダムWG

第 1 回委員会ダム WG (2002.8.29 開催) 結果報告 17

第 2 回委員会ダム WG (2002.9.19 開催) 結果報告 18

一般意見聴取WG

第 1 回委員会一般意見聴取 WG (2002.9.11 開催) 結果報告 19

最終提言作業部会

第 1 回最終提言作業部会 (2002.9.12 開催) 結果報告 20

第 2 回最終提言作業部会 (2002.9.28 開催) 結果報告 21

< 琵琶湖部会 >

第 17 回琵琶湖部会 (2002.8.8 開催) 結果概要 (暫定版) 23

琵琶湖部会現地調査 (2002.9.22 開催) 結果概要 28

< 淀川部会 >

第 17 回淀川部会 (2002.7.31 開催) 結果概要 (暫定版) 32

第 1 回淀川部会現地対話集会 (2002.8.28 開催) 結果報告 37

第 2 回淀川部会現地対話集会 (2002.9.7 開催) 結果報告 (午前の部) 38

(午後の部) 39

第 3 回淀川部会現地対話集会 (2002.9.20 開催) 結果報告 40

第 18 回淀川部会 (2002.9.24 開催) 結果報告 41

< 猪名川部会 >

第 13 回猪名川部会 (2002.8.20 開催) 結果概要 (暫定版) 42

猪名川部会現地意見交換会 (2002.9.21 開催) 結果報告 46

猪名川部会現地意見交換会 (2002.9.21 開催) アンケート集計結果 47

開催日時：2002年9月12日(木) 13:30～17:00

場所：ぱ・る・るプラザ京都 6階 会議室C

参加者数：委員15名、河川管理者19名、一般傍聴者168名

1 決定事項

今後の進め方について

- ・最終提言は「河川整備のあり方に関する提言」と「住民意見聴取についての提言」を統合させ、最終提言作業部会が主体となって作成する。10月24日に当初予定していた第15回委員会を中止し、11月13日に委員会および部会委員全員でとりまとめ案を検討する「拡大委員会」を開催する。
- ・12月5日の第15回委員会で最終提言を確定させる。

委員会ワーキンググループ(WG)について

- ・水位管理WGと水需要管理WGに加えて設立されたダムWGと一般意見聴取WGのメンバーが決定した。また前回委員会での規約改正に従い、WG専任である小尻委員の委嘱状を出して頂くよう近畿地方整備局に委員会より要請した。
- ・新たに水質WGを設立することが決定した。
- ・必要に応じてWGメンバーがヒアリング等の出張を行うことが委員会として承認された。

2 審議の概要

最終提言に関する意見交換

- ・資料2-1「最終提言のとりまとめ方針(案)」、2-2「最終提言目次案」をもとに、庶務から最終提言に関する説明があり、意見交換が行われた。最終提言は委員会中間とりまとめを基本に、各部会の中間とりまとめおよび各WGからの提案、一般からの意見等を盛り込み、委員会として1本化したものを出すことが確認された。「各部会で十分に情報共有と検証を行い、11月13日の拡大委員会での議論に備えるべき」等の意見が出された。

主要論点に関する意見交換

- ・水質、治水、水位管理、水需要管理の4つの論点について意見交換が行われた。
- ・水質については、琵琶湖・淀川水質保全機構殿から資料3-1-1「琵琶湖・淀川水系の水質保全について」をもとに説明頂いた。内容は水質保全問題の基本認識から、100年にわたる琵琶湖の水質問題の変遷、今後の水質保全対策の方向性など。
- ・水位管理と水需要管理は、各WGリーダーからWGの議論内容について説明があった。
- ・治水については「浸水被害の軽減について目標が必要では」との問題提起と意見交換が行われた。

流域委員会の進め方についての要望

「最終提言作業部会の経過を全委員に知らせてほしい」「水需要管理を考えるには国土交通省だけでなく、農林水産省の話も聞きたい」といった要望が出された。

一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者1名から、「中間とりまとめへの一般意見について、どう扱われるのかなど、

プロセスを明示してほしい」との発言がなされた。

3. 主な意見

最終提言に関する意見交換

資料 2-1「最終提言のとりまとめ方針(案)」2-2「最終提言目次案」をもとに、庶務から最終提言に関する説明があり、意見交換が行われた。

<とりまとめ方針、スケジュールについて>

- ・「個別事業の是非については、整備計画原案に関する検討として行う」ことになっているが、この辺もう少し詳しくご説明いただきたい。
→最終提言の中では、個別事業の是非等には触れずに、一般的な考え方、方向性等を示す。整備局には、それをもとに河川整備計画の原案をお作りいただく。(委員長)
→原案が出てきてから、具体的な事業の中身を検討する時間的余裕はあるのか。
→集中的に議論する。少し延びるかもしれないが、今のところこのスケジュールでやっていく。(委員長)
- ・農業の話は農水省、環境の話は環境省の方の意見も聴くべきである。
- ・中間とりまとめにおいて各部会の記述と委員会の記述とで、整合性が取れていない部分があるとすると、今後 1 本化する過程において各部会で十分議論すべき。拡大委員会には、各部会で十分議論したうえで臨まないという意味がない。
- ・WGに参加している委員と参加していない委員では、情報量に差が出ている。WGの議論は、部会や委員会で十分に検討されなければならない。
- ・河川整備計画が出るまでにある程度部会で議論を詰めておく必要がある。
- ・確認だが、WGは最終提言の該当カ所の記述を検討することと、整備計画について検討する材料を委員会に提示するという 2 つの機能がある。(委員長代理)
→そうである。WGは、最終提言とりまとめ以降も続くものとする。(委員長)

<最終提言目次案の文言について>

- ・資料 2-2「3 流域整備計画の変革の理念」の中に“総合的な判断”、また 4-1(1)に“変化に富んだ自然豊かな水系”とあるが、これでは意味が分かりにくいので、もっと具体的な表現に改めるべき。また、4-2(2)に、“社会的な視点を含めて検討”とあるが、漁業関係者の立場からいうと、もっと経済的な視点を含めて書いていただきたい。
→最終提言作業部会で検討することとする。(委員長)
- ・目次の項目に上がっている“計画アセスメント”など、どこのWGでも検討されていない部分をどうするのか。
→各委員から盛り込むべき内容を資料として出していただきたい。

主要論点に関する意見交換

<水質について>

(財)琵琶湖・淀川水質保全機構の穂波事務局長より、資料 3-1-1 をもとに、水質に関する説明が行われ、その後意見交換が行われた。

○説明要旨：資料 3-1-1「琵琶湖・淀川水系水質保全について」

- ・淀川水系の水質保全問題を考えるあたり、以下の 4 つの基本認識が必要である。
1) 広域的かつ高度に水が循環利用されている水系である

- 2) 従来の対処療法的な水質保全対策の転換期にある
- 3) 水質問題はライフスタイルや人の意識と密接に関係する
- 4) 水質保全には流域管理の視点が求められる
- ・ 上記、基本認識をもとに、今後の水質保全対策に向けた取り組みの方向性としては、
 - 1) 対処療法から予防原則、基準達成型からリスク管理へと転換を図る
 - 2) 行政や住民など多様な主体が協働して取り組めるよう、分かりやすい共通の水質改善目標を設定したり、評価手法や情報の共有化を進めていく。また小さな水循環系の構築を考えていく。
 - 3) 一人一人が水を汚さない生活スタイルへの意識の改革に努めていくことが必要。等があげられる。
- ・ 以上を踏まえて以下の4点を提案したい。
 - 1) 環境の時代に則した安全、安心が実感できる水質管理の実現(新しい水質目標や指標の設定、モニタリングの強化、水質汚濁メカニズムの研究、水系全体を統合した水質モデルの開発、水質情報共有化のためのデータベースの整備など)
 - 2) 自然の水質浄化機能を引き出す河川整備の推進(生物多様性の立場に立つ、植生など自然浄化機能の定量化とモデルの研究、ウエットランドの形成などを活用して面源負荷を河川や湖沼の流入口で抑制する技術の開発など)
 - 3) 住民との協働のための基盤整備(愛着ある水辺づくり、環境学習の場を提供する河川整備など)
 - 4) 流域全体での取り組みにむけて河川管理者のリーダーシップを期待したい。

意見交換

- ・ 河川の周辺には廃材や汚物の処理場があり、水質汚濁の原因になっている。そのような汚濁物質を出す施設の設置を許可する行政側にも問題がある。
 - モラルが低いことも問題。堤防道路にゴミが多く、それも河川を汚す原因となっている。
- ・ 河川区域だけで対策を考えても、川の周辺で何らかの影響行為があると手の打ちようがない。土地利用計画等他の計画との調整を図る必要がある。
- ・ 廃材等の設置は、合法で行われている以上取り締まりできない。河川からある一定の範囲のエリア内では、廃棄物等を置いてはいけないというような新しい法整備が必要である。
 - ドイツなど外国で行われているゾーニングの例を参考にしようか。
- ・ すべてが合法ともいえない。はじめは合法で行われていても、最後には違法になるものがあり、そういうところが河川に大きなダメージを与えている。もっと法を厳格に適用せねばならない。
- ・ ゾーニングしたうえで、これから30年かけて川とのかかわりを想定したエリアを広げるといった意味で川幅を広げていくことも必要。そのきっかけとして先のような法律を作ることも視野にいれるべきではないか。
- ・ 古いパチンコ台など、一見廃棄物でも、実は再生用資材として置いているところもある。廃棄物の定義そのものが曖昧ではないか。
- ・ 水質の問題を微細に議論できるのは、地球上の60億人のうち5億人くらいしかいない。残りは、水そのものが確保できないなど何か欠けている。その意味で、世界中での日本の責任についてもどこかで触れておく必要がある。
- ・ 流域全体の視点で見れば、下水道と上水道の位置関係がおかしい。長期的には改善する必要がある。
- ・ 河川の自然条件を一定十分に確保することにより、水質改善に寄与できる。
- ・ 現在の水質の基準は濃度規制のみであり、量規制がないのも問題である。

- ・ 水量の問題は水質と深く関わっている。水量が豊富に確保されれば水質への問題は改善される。水位管理とも関わってくるため河川整備計画で何か言えるのではないか。
- ・ 汚染物質は、単体規制では追いつかない。因果関係が明確になる頃にはすでに手遅れになることも多い。規制手法を変えるべきである。
- ・ 産業廃棄物や農薬問題等、国土交通省の権限外のことはあるが、提言の中には盛り込んでいく必要がある。
- ・ 本日の議論内容については、水質WGにてとりまとめていただく。(委員長)

<水位管理について>

水位管理WGのリーダーである榊屋委員より、資料 3-3「水位管理WGの中間報告について」を用いて、水位管理WGのこれまでの議論内容について説明が行われ、その後意見交換が行われた。

○意見交換

- ・ 生態系に影響を与える要素として、水位の変化と生息域の変化の2つをそれぞれ考えなければならない。(委員長)
- ・ 毎年6月15日に一律に水位を下げることになっている現在の琵琶湖の水位操作は、一般のダムと同じであり区別を行うべきである。琵琶湖の水位管理については、琵琶湖そのものの生態系保護をも考えなければならない。
- ・ 水位操作と漁獲高に関するグラフだが、琵琶湖の漁獲高が減少したのは、琵琶湖総合開発による水位操作が開始されたためだけでなく、護岸堤の完成や外来種の影響など、ほかにも様々な要因をはらんでいる。
- ・ 水位操作については、季節変化との関係を一番の問題とすべきである。周りの環境との調和を考慮に入れないと意味がない。また、水位操作の基準を変えるなら、変えることが及ぼす効果をきちっと検証(評価)しなければならない。大掛かりなことをやって1%しか変化がないようであれば、やっても意味がない。
- ・ 水位操作については、最終提言までに、こうすべきだというはっきりした答えを出すことはできない。(治水、利水に影響のない範囲で)人工洪水を起こすなど、さまざまな条件下で試行錯誤(トライアル&チェック)を繰り返し、その効果を検証していくことが重要である。提言にはそのような内容を含めて記述していけばよい。(委員長)

<水需要管理について>

水需要管理WGのリーダーである今本委員より、資料 3-4「水需要管理WGとりまとめ骨子」を用いて、WGの検討内容について説明が行われ、その後意見交換が行われた。

○意見交換

- ・ 環境用水の創出は新しいことだが、流量や場の条件とも絡んでくる。(委員長)
- ・ 自然環境維持のために水を確保することが許されるかどうか、また水を確保すべきだと言い切れるかどうか、基本的な事項をしっかりと議論しておく必要がある。(リーダー)
- ・ 流量調整は、ダムによってできるところとできないところがある。節水型社会の実現も含めてさらに総合的に考えていく必要がある。
- ・ ダムの攪乱機能(人工洪水)については、流水内と河川内という2つの意味があるので双方の記述が必要。また、生き物の歴史を長期的な視野で捉えるなら、生態系にとって致命的なことだけはおこらないような条件を考えておく必要がある。
- ・ 世界水フォーラムの委員会の会合でも、流域管理が唱えられており、世界の情勢がど

うなっているのか十分認識すべき。世界的には水は有限との認識が一般的であり、たとえ水が余っている時であっても、水は無駄に使わないというのが世界的な常識である。日本もこの立場を基本に据えるべきである。

- ・世界水準から見ると、日本は、やはり節水をしなければならないことは明白である。パリやロンドンに比べると、大阪は一人当たり倍以上の水を使っている。
- ・農業用水については、環境用水としてよりも地域用水として捉えてほしい。単に自然環境や生態系保護のためだけなら、その地域に暮らしている方々の合意を得るのは難しい。

<治水について>

○意見交換

- ・治水については、中間とりまとめで、「壊滅的被害の回避と浸水被害の軽減」を謳っているが、河川整備計画を作るためには、たとえば床上浸水を減らすなど浸水被害を減らすための基準を示す必要があると思う。(委員長)
- ・過去のデータをもとに、基準を決めるのなら、これまでの河川整備と変わらないのではないか。
- ・一口に浸水規模といっても、浸水頻度のみでなく、浸水範囲、浸水の深さなど、意味は多様であり具体的には示しにくい。
- ・たまに大雨が降って浸水するということは、河川整備というよりも、地域の内水処理の分野の問題なのではないか。
- ・今回の意見募集で自治体から頂いた意見書には、治水対策についての意見、要望が多い。いずれにしても、無視はできない。よく検討を行う必要がある。(委員長)

一般傍聴者からの意見聴取と意見交換

一般傍聴者1名より発言があり、意見交換が行われた。

- ・中間とりまとめに対して、県内の自治体から意見をまとめて送ったが、どのような形で討議され、提言に反映されていくのか、教えていただきたい。(傍聴者)
頂いた意見についてはこちらで整理したうえで、最終提言に取り入れるものと取り入れないものに仕分けする。また、意見の全てを最終提言とともに河川管理者に提出する。(委員長)
- ・最終提言の内容に盛り込まれる場合とそうでない場合の判断の基準を知りたい。採用されなかった意見については、その理由を相手に知らせるべきだと思う。(傍聴者)
全てについて、応えることはできない。(委員長)
それについては、一般意見聴取のWGでも、何らかの見解を出すべく議論したい。

以上

開催日時：2002年8月7日(水) 10:00～12:30

場 所：ぱ・る・るプラザ京都 4階会議室5

参加者数：委員6名 河川管理者9名 自治体関係者5名 委員傍聴者2名

1 検討内容および決定事項

自治体の農業の担当者からの説明

滋賀県農政水産部、京都府農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所をお招きし、農業用水の実態について説明が行われ、その後意見交換が行われた。

<主な説明内容>

- ・ 滋賀県：農業用水の特色、滋賀県の農業の特色、地区別の農水利用の事例(琵琶湖逆水地区、河川取水地区)
- ・ 京都府：桂川における農水利用の現状、有効利用の工夫、農水取水施設、日吉ダムにおける放流調整について
- ・ 大阪府：大阪府の農業の特徴、稲作における水利用の実態、淀川からの農水の取水実績、取水設備の状況、地域用水としての活用等

<主な意見交換の内容>

- ・ 農業用水の実態(使用量の変化、使用状況、耕作の形態と水の使用等)
- ・ 農業用水の取水量を把握する方法(用水路での計測、配水ポンプの稼働時間や電気代)
- ・ 農業用水の転用と平常時からの節水の可能性
- ・ 今後の農業用水の増減の見通し(今後の農地の増減見込みと農水の需要の関係)
- ・ 農業用水路と地域社会(地域の景観用水、防火用水等、用水路と河川の連続性の回復等)

メンバー追加の件

水需要管理WGに、琵琶湖部会の宗宮委員を加えて、水質に関する話も今後議論していくことが確認された。

次回以降のスケジュール

次回第4回委員会水需要管理WGを、8月19日(月)午後5時～、第5回は、9月10日(火)午後5時～開催する。場所はいずれも京都駅周辺とする。

次回WGでは、「関西のダムと水道を考える会」の野村氏をお招きし、本日寺川委員より提供された資料2-1～2-3についてご説明いただく。また、近畿地方建設局の元河川部長であった金屋敷氏をお招きし、過去の経験等をお話いただく。

委員より、過去の湧水経験から水の消費量を抑えることに成功した福岡市にお住まいの方、または行政関係者等をお招きして、日常生活における節水の工夫や仕組み等についてお話を伺いたいとの発言があった。招聘者等については今後検討する。

以上

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。詳しい内容については結果概要をご覧ください。

開催日時：2002年8月19日(月) 17:00~20:20

場 所：ぱ・る・るプラザ京都 6階会議室6

参加者数：委員6名 河川管理者8名

1 検討内容および決定事項

水需要管理WGとりまとめについて

- ・ 今本リーダーより資料1-1「水需要管理とりまとめ(案)020819」が、荻野委員より資料2-2「論点別WG水需要管理・水利権」が骨子案として示された。
- ・ 第14回委員会(9/12開催)には、水需要管理のとりまとめの骨子を報告できるよう、次回のWG(9/10)まで、メールにてとりまとめについての意見交換を行う。
- ・ 節水についてとりまとめの中で明確に位置づけるべき、一度取水した水を施設内で繰り返し使えるゼロディスチャージシステムの実現についても検討すべき等の意見があった。

水質の問題について

- ・ 水質の問題について様々な観点から意見交換がなされた。その結果、水質については水需要管理の面からだけでなく多面的な視野で検討していく必要があるとの認識が強まったため、新たに水質専門のWGを作るように委員長に要請する。

情報提供と意見交換

これまで河川整備に携わってきた方として金屋敷氏を、市民の側から利水に関する調査活動を行っている方として野村氏をお招きし、情報提供および意見交換が行われた。

a) 金屋敷氏からの説明

- ・ 水需要管理の議論を聞いて思うこと(実現策がないため議論が空中戦になっている、優先順位の問題、ライフスタイルの切り替えの重要性、農水と環境維持用水は峻別すべき等)
- その後、環境維持用水の重要性等に関する意見交換が行われた。

b) 野村氏からの説明

- ・ 大阪市の過剰な水利権、淀川下流部の農業用水の問題点、大阪府営水道の過大なロス率設定について説明が行われ、現在の水の使用実態からみて余剰な水利権の転用や過剰な水需要予測を見直すなどすれば新規のダム開発は必要ないとの主張がなされた。
- その後、農水の多面的な役割、環境用水としての位置づけの重要性等について意見交換が行われた。

次回のWGについて

- ・ 第5回水需要管理WGは、9月10日(火)17:00より行う。今回は、節水の工夫や仕組みについてご教示できる方をお招きする。推薦できる人がいれば、庶務に連絡を行う。

以上

このお知らせは委員の皆様主に主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。詳しい内容については結果概要をご覧ください。

開催日時：2002年9月10日(火) 17:00~20:00

場 所：ぱ・る・るプラザ京都 6階会議室D

参加者数：委員6名 河川管理者10名

1 検討内容および決定事項

水需要管理WG中間とりまとめについて

- ・ 本日の議論をもとに、今本リーダーが、WGとりまとめ骨子としてまとめ、メーリングリストでメンバーに確認のうえ、第14回委員会にて報告を行う。

とりまとめに関する主な意見

<理念の転換等について>

- ・ 河川法の改正前は「(人の)生活環境が中心」だったが、改正後は「自然環境中心」となった。同じ環境でも捉え方が変化したことは重要である。そういった意味では現状の淀川の流量については、「人がどこまで使えるか」ではなく、「生態系の保全・再生のために十分な水量かどうか」という視点から捉えるべき。
- ・ 利水の安全度を落としても自然に水を返すべき。それで利便性を損なわないように日常からの無理のない節水や水融通等の需要を行うべき。

<方向性について>

- ・ 河川の環境用水には、普段の河川維持用水という意味と、生態系保護のために攪乱を生じさせるための水と2つの意味がある
- ・ 需要予測が正しかろうが、間違っていようが、これ以上淀川の水は使えないというのが、水需要管理ではないか。
- ・ 淀川本川の環境用水と、農業用水路を含めた面的な地域の環境用水の両者の整理が必要。
- ・ 全体の放流量は変えなくても、自然流況に近づけるべく流し方にメリハリをつけ、さらに生態系にとって主要なポイントで高水敷を切り下げ、河川形状に変化をつければよい。
- ・ 自然のためにどの程度の水位調整を行うかについては、答えはないのでは。シミュレーションを行い試行等で、様子を見て放流量を調整していく順応的管理が必要である。
- ・ 淀川にとってどのような生態系が望ましいかといった環境の目標が必要だが、すぐには誰も書けない。

委員および河川管理者による情報提供

- 1) 寺川委員より、資料2『「阪神水道」と4市(神戸・尼崎・西宮・芦屋)の水余り』について、説明が行われた。
- 2) 河川管理者より、「河川整備計画における水質関係について」(資料番号なし)について説明が行われた。

次回のWGについて

- ・ 第6回水需要管理WGは、9月30日(月)17:00~行う。
- ・ 今回寺川委員から提出された資料2について、阪神水道企業団側から内容に対して反論があるかどうかを庶務からうかがい、必要ならばこのWGで反論できる機会を設ける。
- ・ 現実の節水対策等に詳しい福岡市の方等に庶務からご都合をお伺いし、可能であれば、次回WGで節水に関するお話をお聞かせいただく。

以上

このお知らせは委員の皆様主に決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。詳しい内容については結果概要をご覧ください。

開催日時：2002年8月23日(金) 14:30~18:15

場 所：ぱ・る・るプラザ京都 6階会議室 D

参加者数：委員6名 河川管理者15名 委員傍聴者1名

検討内容および決定事項

意見交換

これまでに収集した水位管理に関するデータや資料について、主に下記の意見が出された。

洗堰による水位操作について

- ・ 下流への影響を考慮した場合、砂州の水位低下速度に影響を与える堰の閉め方に配慮が必要。
- ・ 琵琶湖の水位を考慮した場合、6月15日に必ず-20cmにするとということに問題がある。固定的な運用を変えることを検討する時期に来ているのではないか。また、急激に水位を下げることの影響を考えるべき。
- ・ 浜欠けについては、水位が低い方が好ましいことは事実であるが、水位操作が与えている影響は少ないと考えられる。
- ・ 琵琶湖と淀川で相反する事項が出てくる。それを検討する必要がある。
- ・ 洗堰の影響で下流に本来の水量が流れていないのであれば、下流の生態のために水を流す操作が有り得るのか検討すべき。

水位操作全般について

- ・ 生物にとって水位の急低下は問題があると感じる。水位上昇にはある程度耐えられる。
- ・ 産卵期など生物にとってクリティカルな時期をどうクリアするか、という視点で考えるべき。
- ・ 何らかの変更を行った場合、その影響をモニタリングし、フィードバックする仕組みが必要。
- ・ 例えば琵琶湖では水位操作に加えて湖岸堤の整備による水辺移行帯の喪失など他の要因も重なって生物に大きな影響を与えている。要因を仕分けする必要がある。
- ・ 目標をどこに置くのか、を検討する必要がある。

委員からの情報提供

西野委員より資料2-1「琵琶湖の水位低下と生物」、資料2-2「水位操作規則変更が琵琶湖の生態系、とくに魚類および底生動物に与えた影響について」について説明が行われた。

河川管理者からの情報提供

河川管理者より、以下の事項について説明および資料提供が行われた。

高浜(樟葉)地点の日水位、琵琶湖水位、洗堰放流量の経年変化のH4前後での比較/瀬田川流下能力の変遷と琵琶湖水位について/淀川の生態系の豊かな地域の航空写真と横断面図/洗堰操作規則(規則を変更する際の手続き)/ダム貯水池における選択(表面)取水設備の効果について/ヨシ刈りの実態とその是非について/近畿地方整備局管内ダム貯水状況

次回以降のスケジュール

- ・ 第14回委員会(9/12開催)に水位管理WGのメモを提出する必要がある。メーリングリストを通じて意見交換を行い、最終的にリーダーがとりまとめる。
- ・ 次回WGは第14回委員会後に実施する。開催日については調整を行った上で決定する。

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。

開催日時：2002年9月13日（金）16：00～20：30
 場 所：ぱ・る・るプラザ京都 5階会議室B
 参加者数：委員4名 河川管理者11名

検討内容および決定事項

意見交換

最終提言作業部会へむけて、水位管理WGのとりまとめ方針について、以下のことが確認された。

琵琶湖の水位操作について

- ・ 水位操作の変更をするには（変更によるデメリットを上回るだけの）メリットを示すべき。
- ・ 生態系改善のための確度の高い予測を行うため、-20cmへ下げる水位操作を現在の6月15日から弾力的に後ろにずらした場合のシミュレーション（平成4年以降）を河川管理者より提供頂きたい。それをもとに湖岸の浸水面積を算出し、産卵行動への影響を分析する。
- ・ 琵琶湖の生態系の回復には、圃場整備、内湖の減少、湖岸堤の存在、外来種などに対するいろいろな方策を組み合わせて考えていくことが必要。水位管理もその中の1つとして改善の方向を考えていくべき。
- ・ 具体的な水位操作、変更による影響は、実際に試行してみなければわからない。手順は1～2年程度かけて生態系の基礎データ収集 それに基づくシミュレーションの実施と科学的な根拠の提示 試行の実施 モニタリング、改善。

ダムと下流について

- ・ 水位にだけ限定してダムを議論するのではなく、ダムの存在そのものによる問題点（アオコの発生等）を指摘していくべきでは。
- ・ ダムの影響としては、生物の移動経路の分断、土砂供給の遮断、があげられる。
- ・ 具体的なデータをもとに、状況の異なる個別のダムについての検討が必要。ダム下流をどういう川にしていくかで課題も異なる。
- ・ 水需要WG、ダムWG等と重なる部分多い。WG間の意見交換や合同WGなども必要では。

淀川大堰の操作について

- ・ 大阪湾全体を考えた場合に、堰下流の生態系の保全は必要か？潮の干満が堰で止められている現状では水の動きがないため、夏期に堰下流の底付近が頻繁に無酸素になり、その度に底生動物群集はごく一部の種を除いて死滅している可能性がある。現在生息している底生動物は、大阪湾の別の場所から浮遊幼生が移動、定着したのかも知れない。もしそうだとしたら、他の場所（幼生の場所）を保全した方が意味があるのでは。
- ・ 堰上流への影響（水位低下によるワンドの水抜き、間隙水の入れかえは可能か等）

河川管理者からの情報提供

河川管理者より、以下の事項について情報提供が行われ、それをもとに意見交換が行われた。

ダム貯水池の運用状況 / 琵琶湖の湿地面積データ、内湖の減少の推移、琵琶湖水位低下にともなうリター上水域の減少量と干陸面積の水深別算出結果 / 淀川大堰の放流実態と大堰下流汽水域における塩水分布状況と生物相、渇水による生物への影響、維持流量と生態系の関係 / 汽水域の現状と課題

次回以降のスケジュール

- ・ 次回WGは10/2開催。ダムと下流の問題、および淀川大堰と下流について検討する。
- ・ メールを通じて意見交換を行い、次回WGで最終提言作業部会（10/10開催）への報告をとりまとめる。報告の内容については、問題点の抽出、解決のための方向性を示すこととし、結論のでていない部分については、検討のために必要なデータ、調査・試行の必要性等について記述する。

以上

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。

開催日時：2002年8月29日(木) 14:00～17:20
 場 所：ぱ・る・るプラザ京都 4階会議室5
 参加者数：委員8名 河川管理者19名 委員傍聴者2名

1 検討内容および決定事項

検討の前提、フレーム等について

- ・ ダムWGでは主としてダムの一般的な事項について議論を行い、個別のダムについては、ケーススタディ的に取り上げる。現在淀川水系で計画中の4つのダム(川上ダム、大戸川ダム、丹生ダム、余野川ダム)や天ヶ瀬ダムの再開発事業など、個別のダム事業についてどこまで踏み込むかは、議論を進めながら考える。

フリーディスカッション

各委員および河川管理者が、これまでの流域委員会での議論を踏まえて、ダムの問題に関する意見や、このWGに期待することなどを個人の意見として話した。

<委員の主な意見>

- ・ ダムについては、環境の問題だけではなく、住民不在の開発等の問題もこれからの検討が必要。
- ・ 4つのダムを前提としてそれぞれにどのような問題があるか議論すべき。
- ・ 従来型のダムの、アオコや淡水赤潮、魚の冷水病、流砂の遮断等の問題に対応できるような新しい技術を考えるべき。
- ・ ダムがなければ、今の便利な生活が成り立たないのも事実。
- ・ 森林の水源涵養機能の限界、雨量予測の不確実性、地球温暖化と変動性、日本の将来の産業構造の行方も含めて、水需給を考えるべき。さらに土砂のコントロール技術の検討も必要。
- ・ ダムを個別に検討するだけでなく、流域全体で考えるべき。

<河川管理者の主な意見>

- ・ 委員会や部会の席ではダムについて十分に説明できる機会がなかった。WGでは、ダムの効能や代替案の可能性等について、正確な資料をもとにじっくり説明を行いたい。
- ・ ダムの効果・役割について、委員や流域住民に理解してもらうことが最重要だと考えている。
- ・ 壊滅的被害の回避という、治水の理念転換の中でダムをどう位置づけるのか。

今後の予定について

- ・ 第2回ダムWGは、9月19日(木)16:00～19:00に行う。淀川水系の既存のダムおよび計画中のダムについて河川管理者より説明を聞く。河川管理者には以下の資料を準備して頂く。
 - a. 既存および計画中のダムに関する資料(事業目的、ダムの概要、問題点等を明記)
 - b. 丹生ダムについてのより詳しい資料(ケーススタディとして取り上げるため)
 - c. 農水系ダムや府県が管理するダムも含めて流域の全てのダムを一枚の地図に示したもの。
- ・ 庶務は、これまでに河川管理者より提出されたダムに関する資料を整理し、事前に委員に送る。
- ・ 第3回ダムWGは10月6日(日)14:00～21:00に行う。
- ・ 10月中旬～下旬までに第4回WGを開催する。

以上

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。詳しい内容については結果概要をご覧ください。

開催日時：2002年9月19日(木) 16:00～19:40
 場所：ぱ・る・るプラザ京都 6階会議室D
 参加者数：委員7名 河川管理者21名 委員傍聴者4名

1 検討内容および決定事項

自治体や他省庁との連携について

- 河川管理者より、「滋賀県と高時川の治水に関する考え方についての擦り合わせができていないため、丹生ダムの説明資料が用意できなかった」旨の報告があったことをきっかけに、自治体や他省庁との連携の必要性と課題、上流から下流まで河川全体での一貫した構想の必要性等について議論が行われた。
- その結果、ダムWGから委員長に対して、「中間とりまとめで打ち出した新しい河川整備の理念をどのように流域自治体や関係する他省庁等に対して説明し、オーソライズしていくべきかを検討する必要がある」と、提案することとなった。

情報提供と質疑応答

河川管理者より、「ダムと堰」に関する一般的な機能や課題についての説明が行われ、並行して委員との質疑応答も行われた。

<主な説明内容>

- ダムと堰の違い、ダムの種類と目的、ダムの機能(洪水調節ルール、湯水時の対応、発電の仕組み、排砂や魚道等環境への取り組み)、ダム湖の水質の現状、砂防ダム、固定堰と可動堰等

<主な意見と質疑応答>

- 治水の理念転換によって流量や堤防の高さなど物理的な数量や形状に違いは出るのか。
- 壊滅的被害について定義があいまいなのではないか。
- 「壊滅的被害の回避」とは、「破堤による壊滅的被害の回避」を意味している。つまり、人工構造物である高い堤防が壊れることにより、被害をより大きくすることを防ぐという意味である。誤解のないよう理解を一致させる必要がある。(河川管理者)
- ダムがあったために水害が発生したと勘違いされている場合がある。ダムが水害を助長することはない。専門家が正しい知識を知らせる必要がある。
- ダムがあっても、貯水容量を超えた場合には、流入した量と同じ量を放流するため、多くの河川が合流する下流では、水害が発生する可能性もある。ダムによる治水の限界を住民にきちんと知らせてなかったことは反省している。(河川管理者)
- ダムにたまった砂も問題。砂も流せるような川、ダムにする必要がある。
- 下流の河川に土砂を排出する方法としては、排砂ゲートの設置やバイパストンネルが考えられる。(河川管理者)

今後の予定について

第3回ダムWGは、10月6日(日)14:00～21:00(途中休憩1時間)に行う。河川管理者には、ケーススタディとして取り上げて議論するダム(どのダムになるかは未定)についての説明をお願いする。また、本多委員から、ダムの環境アセスメントについて(20分程度)の情報提供をいただく。

以上

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。詳しい内容については結果概要をご覧ください。

開催日時：2002年9月11日(水)14:00～16:15

場 所：ぱ・る・るプラザ京都6階 会議室6

参加者数：委員7名

1 検討内容および決定事項

一般意見聴取WGの体制について

- ・リーダーは、三田村委員、サブリーダーは、塚本委員とする。
- ・河川管理者には、議論のプロセスを理解してもらうことと、これまでの取組みなどについて伺うケースが予想されることから、毎回出席を要請する。
- ・議論を円滑に進めるため、メーリングリストを利用する。
- ・WGは、今後、3回開催予定。最後のWGで最終提言(一般意見)のWG案を確定させ、10月24日に予定される第4回最終提言作業部会に提出する。

今後のWGの進め方について

- ・関係住民の意見の反映の方法だけでなく、あり方について、幅広く検討する。
- ・流域委員会における、一般意見に関係するこれまでの活動を整理し、評価した上で、課題などを抽出する。
- ・住民意見聴取に関する問題について、WGメンバーがヒヤリングに出て行く事も検討する。このことは、委員会にて承認いただくようお願いする。
- ・これまでに寄せられた一般意見に対する流域委員会としての対応、及び「関係住民の意見反映方法の提言」をより良いものとするための試行的活動については、引き続き検討する。

フリーディスカッション

- ・淀川水系における住民意見聴取については、海外の事例を参考にするだけでなく、淀川らしい住民参加のあり方を検討すべきだ。
- ・住民意見反映のあり方については、手法の議論に留まらず、河川管理者と住民との関係まで含めて包括的な議論が必要だ。
- ・河川整備計画は、長期のスパンで検討されるべきであり、特に若い世代の意見を取り入れる手法を検討すべきである。
- ・住民の意見を無視して委員の専門的な議論だけで話を進めていくのはよくない。住民の意見はしっかり聞くべきだ。

2 次回のスケジュール

- ・委員のスケジュールを調整し、決定する。

以上

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を参照下さい。

開催日時：2002年9月12日（木） 16：50～18：00（委員会終了後）

場 所：ぱ・る・るプラザ京都 6階 会議室5

参加者数：委員6名

1 検討内容および決定事項

最終提言の作成方針について

体制等について

- ・ 今本委員にリーダーに就任頂くことが確認された。
- ・ WGリーダーが作業部会を欠席する場合は、WGメンバーから代理をたてて出席して頂く。
- ・ 計画アセスメントや住民意見聴取など計画策定、推進に関して専門性の高い山村委員に、作業部会メンバーとして参加頂くようお願いする。

今後の進め方について

今本リーダーより以下の事項が提案され、了承された。

- ・ スケジュール的に迅速なやりとりが必要であるため、作業部会メンバーのメーリングリストを作成し、メールでの意見交換を活発に行いながら進める。
- ・ 最終提言とりまとめに対して随時各委員から意見を頂けるよう、作業部会の内容は全委員に発信していく。
- ・ とりまとめ案作成に関しては、庶務が中間とりまとめや今までに出された意見をもとにたたき台を作成し、章ごとの担当主査がチェックしていく。作業部会メンバー以外にも主査を依頼することを予定する（WGでの検討部分はWGメンバーにも担当頂く）。

次回作業部会に向けた作業

- ・ 最終提言目次案（第14回委員会資料2-2）の構成について、項目のたて方、内容の分類、新たに追加すべき項目、などを再検討する。担当者は寺田委員、榎屋委員とし、山村委員にも支援をお願いする。
- ・ 庶務は順次、可能な部分のとりまとめをしてたたき台を作成し、作業部会に提出する。

「中間とりまとめへの一般からのご意見」の反映について

- ・ 「中間とりまとめ」に対して寄せられている多くの一般意見については、最終提言とりまとめに際して作業部会等で出来るだけ検討する。
- ・ 相反する意見もあり、全てを反映することは難しい。また、寄せられた意見の取り扱いはずしも数の多少には左右されない。

今後のスケジュール

- ・ 次回作業部会（9/28）では全体の目次構成を検討し、各章の主査を決定する。
- ・ 10/10の作業部会にて、WGでの検討を反映させて提言の最終案を検討できるよう、9月末までにWG結果を報告頂く。

以上

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。

開催日時：2002年9月28日（土） 13：30～16：40

場 所：ぱ・る・るプラザ京都 6階 会議室6

参加者数：委員8名

1 検討内容および決定事項

アウトプットの関係について

- ・ 当初、「河川法に基づき、河川整備計画策定時に河川管理者が行う意見聴取・反映に関する提言」（以下、「意見聴取・反映に関する提言」）は「最終提言」に統合して提出する、としていたが、性格が異なるものであるため、2つのアウトプットを分けて提出する。

最終提言案の目次構成について

- ・ 目次構成と各章の主担当および担当WGが決定された（別紙1参照）
- ・ 1、2章では現状認識、特性、問題点を記述する。3章では理念を述べ、4章で理念を具体化する基本的な方向を述べる。3、4章では、3-1、4-1で全体的な考え方や視点について記述し、3-2、4-2以降で治水、利水といった分野ごとの記述を行う。

最終提言案作成について

- ・ 最終提言は、中間とりまとめを出発点として、WG報告等をもとに必要な応じて追加、削除、変更を行う。
- ・ 「中間とりまとめ」では誤解を受ける表現があったので、表現には十分な注意をはかりたい。
- ・ 流域委員会の出す提言よりも先を行く原案を河川管理者が出すことは考えにくい、委員会の最終提言はより先進的でなければならない。
- ・ すでに進められている自治体の施策や計画などとの整合性には囚われずに、理念の転換、望ましい河川整備の方向性を示すとの立場にたって提言すべきである。
- ・ 新しい表現（造語）の使用については注釈をつけるなどの配慮をする。

WGの役割について

- ・ WG報告は「最終提言」のWG担当箇所の文章案の形式で提出頂く。WGは最終提言提出後も河川管理者から提出される整備計画原案の検討に備え引き続き十分な検討を行う。

今後のスケジュールについて

「最終提言」について

- ・ 次回最終提言作業部会（10/10）までに、各担当者およびWGが文章案を作成する。特に第3章「流域整備の理念の変革」についてはできる限り完成させて提出する。3-2～3-5については10/10以前に文案を提出し、それを受けて3-1「流域整備に関する基本認識」を作成する。
- ・ とりまとめスケジュールが切迫しているため、次回最終作業部会（10/10）終了時点の素案の段階から委員全員に内容を発信し、早い段階から意見を出して頂く。最終提言案に対して意見いただく場合には、具体的な文章案（修正案）の形で提出いただく。

「意見聴取・反映に関する提言」について

- ・ 第15回委員会（12/5）までにWG案を作業部会に提出頂き、作業部会での検討を経て第15回委員会で提言案について審議する。

以上

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。

1. 最終提言

<目次案および主担当>

目次案	内容	主担当	
とりまとめの目的等	最終提言にあたって	芦田委員長、庶務	
	■淀川水系流域委員会の目的と特徴		
	■中間とりまとめの位置付けと構成		
1. 河川をめぐる現状とその背景	・現状の問題認識	芦田委員長、庶務	
	・治水、利水、利用、環境面における現状とその背景		
2 流域の特性と問題点	2-1 琵琶湖・淀川水系の概要	芦田委員長、庶務	
	2-2 琵琶湖とそれに注ぐ川の特性と問題点		
	2-3 淀川流域の特性と問題点		
	2-4 猪名川流域の特性と問題点		
3 流域整備の理念の变革	3-1 河川整備に関する基本認識	・総合的な視点 ・流域、まちづくり ・文化・歴史・風土	川那部委員
	3-2 治水		今本委員、池淵委員
	3-3 利水・利用		水需要管理WG
	3-4 環境(水質、水位変動含む)		江頭委員、榎屋委員、宗宮委員、水位管理WG、水質WG
	3-5 住民参加		一般意見聴取WG
4 整備計画のあり方	4-1 基本的な考え方	・望ましい姿、視点等	—
	4-2 治水・防災		今本委員、池淵委員
	4-3 利水		水需要管理WG
	4-4 利用		庶務
	4-5 環境(水質、水位変動含む)		江頭委員、榎屋委員、宗宮委員、水位管理WG、水質WG
	4-6 ダム・貯水池		ダムWG
	4-7 住民参加	仕組みづくり、情報発信、管理のあり方	一般意見聴取WG

<作成スケジュール>

- ・第3回作業部会(10/10開催)までに案をできる限り作成する。
- ・特に第3章については3-1総論作成(川那部委員)のため、3-2～3-5担当者は10/7を目処に文書案を作成し、庶務へ提出する。
- ・10/24にはほぼ「最終提言(案)」の完成をめざす。

2. 河川法に基づいて河川管理者が行う意見の聴取・反映に関する提言

<主担当>

- ・一般意見聴取WG

<スケジュール>

- ・11/13(拡大委員会)～12/5(第15回委員会):WG作成案を作業部会に提出、作業部会にて検討
- ・12/5(第15回委員会):提言案を検討

第 17 回琵琶湖部会（2002.8.8 開催）結果概要（暫定版）

庶務作成

開催日時：2002 年 8 月 8 日（木） 13:30～16:50

場 所：ホテルニューオウミ 2 階 おうみの間

参加者数：委員 11 名、河川管理者 13 名、一般傍聴者 79 名

1. 決定事項

今後の部会スケジュールについて

- ・第 18 回部会を 10 / 3(木)、第 19 回部会を 11 / 9(土)、第 20 回部会を 12 / 14(土)に開催する。

部会の論点別検討班（WG）について

- ・一般意見聴取・反映を考える検討班のメンバーは、三田村委員、嘉田委員、村上委員、仁連委員の 4 名とする。
- ・最終提言に向けて文章を調整、推敲する検討班を設置する。メンバーは 2 名程度とし、1 名は中村委員、もう 1 名は中村委員の指名により決定する。
- ・その他の検討班設置に関して、水質については中村委員と宗宮委員で必要性を検討する。生態系の回復機能に関しては、西野委員を中心に、小林委員、倉田委員、村上委員で協力して既存の情報を収集する。

委員会のWGについて

- ・委員会WGメンバーへの部会委員の推薦は資料 5 - 1 のとおり了承された。
- ・ダムWGに対し、ダムが下流の琵琶湖に与える影響についても検討していただくよう要請する。

一般意見聴取および現地調査について

- ・一般意見聴取については検討班が、現地調査については提案者が主体となって計画し実施する。なお、中間とりまとめに対して寄せられた意見への対応についても検討班にて検討する。

2. 審議の概要

第 13 回委員会の報告

資料 1-3「今後の流域委員会の進め方について」をもとに説明が行われた。

委員会ワーキンググループ(WG)についての情報共有

- ・水需要管理WG：寺川委員および河川管理者より説明が行われ、意見交換が行われた。
- ・水位管理WG：西野委員より説明が行われ、意見交換が行われた後、河川管理者より資料 2 - 2「水位管理WG報告概要」を用いてWGで報告された琵琶湖の水位に関する各シミュレーションの結果等の説明が行われた。

中村委員からの情報提供

資料 3「北湖湖内環境の変化をめぐる最近の知見から人為水文システムをどう考えるか」を用いて、琵琶湖の湖底の変化をはじめとした説明が行われ、意見交換

が行われた。

河川整備計画原案作成にあたっての河川管理者からの情報提供と意見交換
資料 4「琵琶湖周辺の治水対策の現状」を用いて、琵琶湖総合開発などの治水対策の歴史的経緯、洗堰操作の現状等についての説明が行われ、意見交換が行われた。

一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 2 名から、西の湖の問題点と対策及びヨシ帯造成事業に関する発言があった。

今後の琵琶湖部会の進め方について

資料 5 - 1「今後の琵琶湖部会の進め方について」をもとに、WG、一般意見聴取反映の試行、現地視察等についての案が示され、「1. 決定事項」の通り決定された。

3．主な報告と意見

委員会ワーキンググループについての情報共有

< 水需要管理WGの情報共有 >

寺川委員と河川管理者より、資料 2-1「委員会WG、結果概要、結果報告」を用いて水需要管理WGの経過について報告が行われた。

(意見交換)

- ・水需要管理の実現には、実際に水を使っている個人の考え方や利水事業者による水需要管理の取り組みが大きく関係してくる。特に、管理によって一定の制約がかかる利水事業者に話を聴くことが重要ではないか。(委員)

ワーキンググループとして利水事業者の意見を聴きたいという要望があるなら、利水事業者が同席してくれるかはわからないが、お願いすることも可能だと思う。(河川管理者)

新しい河川法によって、新たに「環境」が加えられ、「環境」を保全していくために水需要を抑制してくことが社会的な要請となってきた。この背景を利水事業者などに説明し、納得してもらったうえで話を聴くべきだろう。(委員)

< 水位管理WGの情報共有 >

西野委員より、水位管理WGの経過について報告が行われた。また河川管理者からは資料 2-2「水位管理WG報告概要：琵琶湖工事事務所からの提供資料」をもとに、瀬田川洗堰操作と琵琶湖の水位変動、自然に近い水位変動を行った場合のシミュレーションなどについての説明があった。

(意見交換)

- ・ワーキンググループでは、初夏の低水位操作がコイ・フナ等の魚の産卵活動に影響を与えていると議論されているが、それを傍証するだけのデータが十分に集められていない。より多くの情報が必要である。(委員)

生態系の変化に関するデータはいろいろあるが、変化の要因が湖岸堤整備や

水位操作等々、多岐に渡っているため、水位操作との関連を示すのは非常に難しい。(委員)

中村委員からの情報提供

資料 3-1「北湖湖内環境の変化をめぐる最近の知見から人為水文システムをどう考えるか」を用いて、情報提供が行われた。

[説明要旨]

流域委員会として、直轄事業と北湖の湖内環境問題をどう考えていくべきなのか。これまでに提出されている様々な分野のデータを合わせて解釈してみた。

最近の知見

水温と溶存酸素、リンの溶出をめぐる見解

- ・窒素濃度、COD は増加傾向にある。また、積雪量の減少により、湖底への酸素供給量が減少。湖底の水温は微増。

湖底生態系の変化、沿岸部の変化

- ・69年と95年の比較調査の結果、底質は泥が増え、砂が減少。
- ・カワニナ タニシ、シジミ類 タテボシガイといった種の交代が起きている。

北湖と塩津湾の水質の関係

- ・湖北の循環型の農業用水システム(琵琶湖 余呉湖 余呉川 琵琶湖)によって発生した農業排水が塩津湾の環流と内部波によって北湖全体に行き渡り、アオコ等の水質汚染が進行している可能性がある等、人為的システムが北湖の環境に大きな影響を与えている。

新たな人為的改変の影響検討の必要性

長期的懸念材料は少なくない

- ・流入有機物量の増加、融雪水によって供給される溶存酸素量減少の懸念
- ・結果的に北湖の汚染がかなり深刻になる懸念

上記の「最近の知見」だけでは判断できない

- ・知見が断片的かつそれぞれの関連性が不明で、特定の事業を想定して検討したものではない
- ・1つの事象だけを単独に判断するのは非常に難しい
- ・ダム湖の場合、長期的環境変化との関連性の評価が必要

検討上の課題

- ・湖内環境の変化は複合的に起こる
- ・長期的・不可逆的な影響について「予防原則」の適用
- ・巨大な人為的システムが自然の湖に関わっているというのは、世界的に類を見ない例ではないか

(意見交換)

- ・琵琶湖の生態系と周辺環境は大きな変化を遂げており、水位操作が在来の生物の個体群減少にとどめを刺しているという部分大きい。ダムについても、全体のシステムの中で捉え、水位操作と同様のことにならないように留意してほしい。

- ・水質の問題は、利水サイドで見るか、生態系サイドで見るか、どのようなタイムスパンで考えるかによって異なってくる。また、水質や生態系の変化の理由がわからない段階で、水位操作の影響について質問されても答えようがない。
- ・北湖の深層水温が平均2℃上昇しているということだったが、これと琵琶湖の水位変動、例えば洗堰の放流とは何か関係があるのか。(河川管理者)

水位変動が深層水温に与える長期的・短期的な影響については、わかっていないが、この30年間で水温は、2度ではなく、1度程度上がってきているので、非常に大きな自然の力でなければ、このような大きな変化はおこらないのではないかと思っている。それから、むしろ、ダムの影響を検討しなければならない。そのためには、目的にそったデータを集めてシミュレーションを行い、モニタリングをしていく必要があるだろう。(委員)

直轄事業の特定のダムだけの調査ではなく、特別なプロジェクトを立ち上げて、流域のシステム全体を考慮した検討が必要である。(委員)

以前に実施した類似の実験では、出方(放流)よりも、入れ方(流入)の影響の方が大きかった。(委員)

河川整備計画原案作成にあたっての河川管理者からの情報提供と意見交換

資料4「琵琶湖周辺の治水対策の現状」について、琵琶湖総合開発などの治水対策の歴史的経緯、洗堰操作の現状等の説明があり、その後、意見交換が行われた。

[説明要旨]

1) 現在の治水対策(洗堰操作)

- ・琵琶湖総合開発事業で合意された洗堰操作は、琵琶湖と淀川の水位上昇の時差を利用している。つまり、淀川の流量がピークになる時には琵琶湖の水位はさほど上昇していないので、洗堰からの放流量を制限し、淀川の流下を優先する。その後、琵琶湖の水位が上昇する頃には、淀川の流量が減り始めているので、洗堰を全開にして放流量を増やすことで琵琶湖の水位を下げている。

2) これからの治水の基本的考え方

- ・流域委員会は、壊滅的被害の回避(破堤回避対策)を最優先とすることを基本的な考え方としている。破堤を回避するためには全川での堤防強化が必要だが、完成には相当の年月を要するので、それまでは下流の危険が高まるような上流の浸水被害軽減対策(例:狭窄部の開削、堤防をかさ上げ)は行わない。
- ・琵琶湖沿岸では、破堤による壊滅的被害は起こらないと考えられるが、浸水により家屋などの資産の損失等の被害は可能な限り少なくしなければならない。しかし、流域委員会の治水理念の転換に従えば、下流部の破堤回避対策が完成しないうちは、瀬田川洗堰の全閉操作停止や瀬田川狭窄部開削等の浸水被害の軽減対策を行うことはできない。
- ・よって、浸水被害の軽減対策としては、瀬田川洗堰の全閉操作は続けつつ、後期放流能力の増大を図る(下流における無害流量までは狭窄部の開削を行う)方法

が考えられる。

(意見交換)

- ・浜欠け(湖岸侵食)についても、河川管理者は対策を考え、今後の対策・検討方向を示す必要がある。(委員)
- ・今回の説明はまさに「治水対策の現状」であり、利水や環境を考慮したうえでの「今後の治水対策」ではなかった。河川整備計画原案では、流域委員会の考え方にのっとって、治水、利水、環境をそれぞれ十分に勘案したうえで、主に治水対策を考えた場合にはどうなるかを示して頂きたい。(部会長)

一般傍聴者との質疑応答

- ・西の湖(近江八幡市)での真珠養殖が、水温上昇による藻の繁茂によって、危機的な状況にある。同じく真珠養殖を行う守山市や草津市、堅田内湖でもこれに近い状況となっている。他の貝類の生態も気がかりだ。一日も早い対策を。(一般傍聴者)
- ・滋賀県による現在のヨシ帯造成事業は良くない。1 haあたりの造成費用12億円のうち、実際にヨシを植えるための費用は2、3億円で、残りは堰堤や離岸堤整備に使われている。景観を画一化するこのような事業は続けるべきではない。ヨシ帯造成の必要性は認めるが、事業の進め方の根本的な見直しが必要だ。(一般傍聴者)

この流域委員会は、琵琶湖全体の河川管理計画に関する中期的、長期的な課題に対する議論を行う場であって、急を要する問題の議論は、あくまでも参考意見としてお聴きするにとどめるということになっている。いずれも中長期的な問題を考える際の参考意見として考えさせて頂くが、流域委員会では対応できないので、関係者は各担当行政に言って頂きたい。(部会長)

発言の詳細については「議事録」を参照下さい。

淀川水系流域委員会 琵琶湖部会 現地調査 (H14.9.22) 結果概要

庶務作成

1. 開催日時・場所

日 時：平成 14 年 9 月 22 日 (日) 9:30~17:30

場 所：丹生ダム建設予定地付近、余呉町山村開発センター

参加者数：部会委員 8 名 河川管理者 13 名 ダムWG委員 4 名、一般同行者 4 名

2. 現地調査(視察)について

琵琶湖部会による丹生ダム計画地周辺の現地調査(視察)が行われた。今回は、これまでの現地視察時に工事中等の事情で視察できなかったところへ足を運び、また地質学等の専門家の方々もお呼びしてお話をいただいた。視察後は、丹生ダム計画や今回の視察についての感想や意見の交換が行われた。

3. 概要

(1) 視察コース

妙理谷工区

妙理谷周辺では、ダム建設にともなう県道の付け替え工事を行っている。工事による高時川の濁水を防ぐ対策として、土嚢や法面保護、沈殿池などの取り組みについての説明が行われた。委員からは、適切な水質調査が行われているか等の質問があった。

丹生ダム ダムサイト

丹生ダムダムサイトでは、ダムの概要や計画の進捗状況に加え、ダムサイト周辺の活断層の概略が示された。また、植生の分布、クマタカ・イヌワシ等希少猛禽類の保護やアセスメントの実施状況など環境保全対策への取り組みについて説明が行われた。

断層トレンチ(奥川並、尾羽梨) 調査坑

このあたりは、豊かな自然が残された密林地帯であるが、活断層がダム湖を横切るように走っている。断層の範囲はおよそ 10km で、うち 4カ所で調査を行ったが、いずれのポイントにおいても少なくとも数千年~数万年は活動が起こった形跡がないとの報告が行われた。

奥川並トレンチ、尾羽梨トレンチ周辺を視察したほか、実際に調査坑の中に入り、岩盤の形質を確認した。

注：地面を溝状に掘って地中の断層面を観察する調査法をトレンチ調査という。

(2) 専門家の方々からの説明

西村氏(京都自然史研究所)からの説明

- ・このあたりの地質は、深海底でたまった玄武岩からなっており、地層の発達は遅い方である。

- ・ 奥川並断層は国道 365 号線沿いに走る柳ヶ瀬断層から分かれる扇状構造となっている。
- ・ 細かい岩が多く、計画されたロックフィルダムには適した構造となっている。

奥氏（森林総合研究所 関西支所）からの説明

「河畔林の景観とレクリエーション利用」

- ・ 河川の源流域を歩く人たちに支持されている河畔景観とは、河川の自然流下が形成する水辺と樹林、森林の組み合わせによる独特の構図が好まれている。
- ・ 河川環境におけるレクリエーションは、その場所の環境特性によって様々な形態に分けられ、来る人も目的も変わる。
- ・ 河川環境の人為的改変は、生物の生息地のみならず、人間にとっての活動の場も大きく変える。レクリエーション活動環境や風景としての源流域は、希少になりつつあるので、上流～下流全体をトータルで見据えた利用方法のゾーニング、および源流域における河川景観保護管理エリアの設定が必要とされている。

鳥塚氏（南浜漁業協同組合）からのお話

- ・ 濁水を川に流すことは、川に住む生き物たちに壊滅的な打撃を与える。とくに余呉高原スキー場の工事が出している濁水はひどい。もともと、この地域は豪雪によってたびたび濁水が出ていたが、そこに工事現場から濁水が加わり、漁場は惨憺たる状況である。姉川の濁水は、琵琶湖（北湖）にも悪影響を与えていることを認識し、改善の努力を考えていただきたい。

（３）懇談会

現地調査終了後、余呉町山村開発センターにて、参加者による懇談会として、調査視察の感想や説明者への質疑応答など意見交換が行われた。

意見交換

< 西村氏の説明に関する意見交換 >

- ・ 本日は主に活断層について視察を行ったが、地質学の専門家として、どのような危険性があると感じられたか教えていただきたい。
活断層ではあるが活動の連続性は薄いようだ。今は判明していないとのことだが、もし湧水があれば少し水漏れの心配がある。また、伏流水の流れと河川の流れは違うので調査しておいた方がよい。（西村氏）
- ・ 大滝村の地震災害は、ダムが引き起こしたと言われている。大きなダムは地震を誘発するという話があったが、それは本当か。
ダムそのものが地震を誘発するかどうかは分からない。水を溜めると小さな地震はよく起こるが、丹生ダムはロックフィルダムであるため、あまり影響はないと思われる。（西村氏）

< 奥氏の説明に関する意見交換 >

- ・ 田舎の人や都会の人というような属性の違いで、好む景観も違うのではないか。
ここで上げたような一般の人が好む景観の特徴については、あまり属性には影響され

ない性質のものだと考えている。

- ・ もし、ダムができた場合、そのアンケート結果を応用して、良い景観をここに作るができるか。

はっきりとは言えない。ただ、ダムを作った場合の景観は、本来ここにあった景観そのものから、大きく変わってしまうだろう。

- ・ 何十年という長いスパンで捉えた場合、人々の好む景観というものは変わってくるのではないか。

変わらないと思う。

<その他フリーディスカッション>

- ・ 今、流域委員会委員に求められていることは、ダムをつくるか作らないかの判断であるが、今日の説明内容は、ダムを作ることを前提とした話ばかりであったので、その判断材料とはなりえない。

- ・ 高時川は、自然が豊かで素晴らしい川だと感じた。丹生ダム建設の最大の目的は大阪府の水需要を満たすことだが、一都市のために、こんな広大で貴重な自然を犠牲にしてしまつてよいのだろうかと感じた。

丹生ダムの水は、高時川、琵琶湖を通過して大阪へ流れる。ダムができれば、高時川の瀬切れや琵琶湖の濁水を改善する効果もある。生態環境についても、姉川、安曇川ではアユの人工河川による孵化を行っているし、湖北や琵琶湖の水文システムにも貢献する。大阪府だけがメリットを享受するわけではない。(河川管理者)

今はアユの産卵に非常に重要な時期であるにも関わらず、姉川の本流には水がない。頭首工によって農地に水が取りこまれているせいである。清流が河口まで届かないと、河川整備計画が完成したと言えない。

- ・ 一番大きな瀬切れは、ダムなのではないか。

確かに、山の中の生態系が分断されるという意味では、ダムは瀬切れとも言える。

しかし、湖と山が回廊として連続するというメリットもあるのではないか。

- ・ これからは、流域全体の視点で、各ダムの機能を相互に分かち合うという考え方が重要になる。ひとつひとつのダムをバラバラに捉えるのではなく、もっと総合的に考えて行きたい。

- ・ 「高時川のきれいな水をパイプで直接大阪に送ってあげたい」と言っていた人もいた。ダムができて利益を受ける人、逆につらい思いをする人が、ともにこの地域に存在するのに、その人達が不在のまま、ここで議論を行っていることには違和感を感じざるをえない。

- ・ ダムのパンフレットには、作る側にとって都合のいいことしか書かれていない。ダムは流水の正常な機能を維持するというが、ダムの下流の水はどこも汚い。ダムを作ることのメリット、デメリットをともに正直に掲載して一般の方に広報し、対話を行っていく姿勢が必要なのではないか。

ダムができることによって水質が悪化していることは事実であるが、必ずしも全てがそうなるわけではない。水質対策としていろいろなシミュレーションを行っているし、それに応じた対策も検討している。(河川管理者)

<一般傍聴者からの意見>

- ・ 本日の視察を見せていただき、水資源開発公団の方々の真摯な姿勢は立派に思えた。ただ、言いたいことは、これからの自然環境や子供達の環境にとって何が必要か、未来へのビジョンをしっかりと考えたうえで、このダムは本当に必要なのかどうか、そういう視点で考えてもらいたい。

以上

琵琶湖部会（2002.9.22） 現地調査 行程

時間(予定)	乗下車地	内容等
10:30 10:45	余呉町山村開発センター	河川管理者等集合、視察ルートの説明
	妙理谷工区	県道付け替え工事現場周辺
	丹生ダム ダムサイト	
12:20 13:10	奥川並	説明者との意見交換、昼食
	断層トレンチ	
	調査坑	
	尾羽梨	
16:45 17:30	余呉町山村開発センター	参加者による懇談会

説明および発言内容については、現在確認中であり、随時変更する可能性があります。最新の結果概要については、ホームページでご確認ください。

第 17 回淀川部会(2002.7.31 開催) 結果概要(暫定版)

庶務作成

開催日時：2002年7月31日(水) 13:30～16:45

場 所：大阪会館 Aホール

参加者数：委員 16 名(うち 1 名は部会長の要請により参加)、河川管理者 20 名、委員傍聴者 1 名、一般傍聴者 144 名

1 決定事項

- ・淀川部会としての現地対話集会を、8月28日(水)、9月7日(土)、9月20日(金)に開催する。
- ・次回第18回淀川部会は、9月24日(火)13:30～16:30に開催する。第14回委員会(9/12)に提出される最終提言の素案をもとに、第15回委員会(10/24)に向けて、淀川部会としての提案内容を検討する予定。

2 審議の概要

委員会およびWGからの報告

資料1-1「委員会および他部会の状況」、資料1-3「今後の流域委員会の進め方について」をもとに、前回部会以降に開催された委員会や他の部会、委員会WGについて説明が行われ、流域委員会としての最終アウトプットや検討スケジュール、委員会と部会の役割分担について確認された。

今後の淀川部会の進め方について

資料2-1「今後の淀川部会の進め方について」を用いて、最終提言や原案審議に向けた部会の作業スケジュールが説明された。

河川管理者との意見交換

資料3「木津川筋の治水の考え方について」を用いて、河川管理者より説明が行われ、委員と河川管理者の間で、壊滅的被害の考え方や治水対策の優先度を中心とした意見交換が行われた。

一般意見聴取の会(現地対話集会)について

資料4「淀川部会による現地対話集会(案)」のとおり、第1回(洪水防御、防災)を八幡市、第2回(高水敷利用及び環境・水質・生態系)を枚方市、第3回(水需要管理)を京都市で開催することが了承された。開催日は上記「1.決定事項」のとおり。

また、現地でじかに対話する機会を設けて欲しいという木津川流域の首長等の要望が、河川管理者より伝えられた。

一般からの意見聴取

一般傍聴者3名から「現地対話集会の招聘予定者に偏りがみられる」「河川レンジャーの考え方に賛成」などの発言がなされた。

3. 主な意見

<河川管理者からの説明と意見交換>

河川管理者より、資料3「木津川筋の治水の考え方(たたき台)」を用いて説明と問題提起が行われ、壊滅的被害の考え方や治水対策の優先度を中心とした意見交換が行われた。

[河川管理者からの説明要旨:木津川筋の治水の考え方]

中間とりまとめの共通認識

- ・壊滅的被害の回避を最優先 破堤回避対策の実施が必要
- ・浸水頻度の軽減 浸水頻度の高い場所には被害の軽減対策が必要
- ・上下流のバランス 上流部の狭窄部を開削するのは避けるべきだが、下流部の流下能力や破堤対策を考慮した上で、トンネル等の対策は考えられる。
- ・壊滅的な被害の防止を優先するために、破堤回避対策（堤防強化）の実施が必要となるが、完成までには膨大な時間とコストがかかる。一方で、越水による浸水被害の頻度の高い地域では、浸水の軽減対策も実施していく必要がある。

破堤被害と越水被害の比較（木津川上流部 上野盆地）

昭和 28 年 9 月洪水のデータをもとに、上野盆地付近の破堤による被害と、越水による浸水被害の想定を行った結果、次のようになった。

- ・破堤を想定した被害（堤防強化前）の想定は、[浸水面積 184ha 最大浸水深 約 3.5m 指定水位から浸水発生まで 20 分間] となった。
- ・越水を想定した被害（堤防強化後 + 遊水地完成）の想定は、[浸水面積 170ha 最大浸水深 約 3.0m 指定水位から浸水発生まで 60 分間] となった。
- ・結果として、破堤による被害と越水による被害の差は、[最大浸水深の軽減（3.5m 3.0m） 指定水位から浸水発生までの時間の増加（20 分間 60 分間）] となった。

2 つの考え方：優先すべきは破堤対策か、浸水対策か？

この委員会では、高い堤防が一気に破堤して発生する被害を「壊滅的被害」としてきた。これに対して、河川管理者の中で 2 つの考え方がある。

- A：上野盆地の浸水被害想定を見る限り、堤防強化後の越水被害も十分に「壊滅的被害」である。よって、堤防強化による壊滅的被害の回避と同列に、浸水被害を軽減する対策（河川改修やダム）も実施していくべきではないか。
- B：下流部において、破堤による「壊滅的被害」を受ける危険性の高いところがたくさんある。まずは下流部の破堤対策を優先すべきではないか。

[河川管理者との意見交換]

「壊滅的被害」とは？

「壊滅的被害」かどうかの判断基準は浸水深なのか、人命なのか、住民が避難できる時間的余裕の有無によるのか。(河川管理者)

「壊滅的被害」をはっきりと定義するのは難しい。人的被害の多少によって「壊滅」かどうかを区別するのはやめたい。また、浸水深による区別は地上では妥当かもしれないが、地下街のことを考えれば適当とは思えない。やはり、被害額、或いは被害が社会へ及ぼす影響等によって判断されるのではないか。(委員)

被害の原因には都市計画も含めて、堤内地で暮らす人や街の防御の仕方によるものもあり、壊滅的かどうかを考える際には参考とすべき。

「壊滅的被害」を考えるとときには、被害からの回復力や復元力も考慮しなければならない。(委員)

破堤による氾濫水のエネルギーや時間的余裕のなさが「壊滅的被害」をもたらす。越水による浸水被害については、避難のための時間的余裕があるため、相応の対策はとれるだろう。(委員)

そもそも、「壊滅的被害」という言葉だけを取り出して考えれば、深い浸水被害が「壊滅的被害」になってしまうのは当然だ。流域委員会で議論してきたことはそうではなく、高い堤防が一気に切れて氾濫水があふれ出し、街を襲って家屋を破壊し、人命を奪ってしまう、そんな被害が「壊滅的被害」ではなかったか。(河川管理者)

治水の理念転換についての共通認識を

流域委員会が掲げている「破堤による壊滅的被害の回避を優先する」という治水理念の転換について、委員、河川管理者、住民が納得のいくまで議論をするべきだ。(河川管理者)

流域委員会での議論の原点は「水害の輪廻」からの脱却だった。これまでの河川整備は、浸水被害が発生する度に堤防を高くし、洪水を河道に封じ込めるということは何度も繰り返してきた。今後も同じことを繰り返すのか。この「水害の輪廻」から脱却するために、破堤回避対策の優先という理念が生まれてきた。これが流域委員会の基本的な考え方だ。(委員)

三川合流の下流部については、超過洪水を防ぐためにスーパー堤防事業が進められてきた。つまり、従来から破堤回避による「壊滅的被害」対策を行ってきたということだ。流域委員会ではそこから一歩進んで、時間的・技術的・財政的制約の中で、具体的にどういった手法でどこの区間をどう整備するのかを議論すべきだ。(河川管理者：府県)

反論だが、従来は目標降雨を決めて整備をしてきた。スーパー堤防はそのプラスアルファとして、資産の集中している地域の破堤対策として実施されてきた。これに対して流域委員会では、どの堤防においても破堤による「壊滅的被害」を回避することを基本に、浸水頻度の高い地域については対策を実施している。従来の治水の考え方とは全く違っている。(河川管理者)

従来の河川改修は、下流から上流に向かって整備が行われてきた。しかし、堤防補強を主眼に据えた今後の治水整備は、被害規模を勘案しながら整備を進め

ていく必要があるだろう。そういった意味においても、治水理念の転換がうたわれている。(委員)

多くの住民は「堤防は切れない」と思っている。だからこそ、堤防直下に家を建て、地下街もつくってきた。しかし実態は、東海豪雨レベルの降雨があれば、複数地点で確実に破堤する。河川管理者はこの事実を公表し、堤防強化を最優先で行う。それと同時に、リスク分散の観点から、土地利用や街づくりを住民とともに協力して行っていく。これが流域委員会の議論だったと思っている。

もちろん、浸水頻度の高い地域を放っておいてよいわけではないが、基本的な考え方として、堤防補強と地域による治水対策の実施が今後の治水対策の大きな流れではないか。その中で今、浸水頻度の高い地域をどう判断するか、流域委員会や行政がぎりぎりのところで悩んでいる状況だと思っている。(河川管理者)

堤防をつくるとしても、たんに従来通りの考え方・工法では環境への配慮が欠けるなど同じ過ちを繰り返すだけだ。越水を考慮した破堤しにくい堤防をぜひ考えて頂きたい。(委員)

下流の破堤対策と上流の浸水対策のバランスについて

「破堤か、越水か」というシンプルな選択については、破堤対策の優先を異論なく支持できる。しかし、これに上下流問題が絡んで「上流の浸水対策か、下流の破堤対策か」という選択になった時、河川管理者の中で意見に違いが生まれてくる。(河川管理者)

破堤と越水では被害が違う。確かにその通りであり、破堤対策の優先にも基本的には異論はない。問題はその後、上流の浸水被害を後回しにして、下流の破堤対策を完遂するために優先的に下流部に投資するのかどうか、という点にある。(河川管理者)

河川管理者の中で、「上下流のバランス」に関する解釈にズレが生じている。例えば、堤防強化をしたとしても、上野盆地の浸水被害は軽減できない。下流の危険度を鑑みれば、岩倉峡(狭窄部)の開削もできない。上下流ともバランスよく整備するのであれば、ダム等で上野盆地の浸水被害を軽減させる必要があるのではないか。(河川管理者)

これは個人的な意見になるが、下流部の危険度が増すような上流部の治水対策は、下流部で何らかの対応がなされるまでは控えるべきだろう。しかし、上流部の治水対策が下流部に影響を与えないならば、それは投資バランスの問題だろう。従って、下流の破堤対策を行う一方で、上流の浸水対策を実施することもあり得るのではないか。

琵琶湖と淀川は上流・下流の関係にあるが、琵琶湖においては下流のために洗堰の全閉全開操作を前提とした対処を行ってきた歴史的な経緯を踏まえ、浸水対策が必要だと思っている。(河川管理者)

滋賀県では、県が管理している河川 2200km のうち 1260km の改修が必要だと考えている。小規模の河川が多いこと、天井川が多いことを考慮すれば、やはり従来からの治水の考え方に従って、河道断面の確保が重要である。治水理念の転換を淀川水系の全域にわたって適用するのであれば、流域委員会は河川ごとの具体的な整備案を考えなければならないのではないか。(河川管理者：府県)

河川管理者間で意見の相違があるのは、理念の転換ではなく、地域の問題としての捉え方ではないか。下流だけを優先して他をやらないというわけには行かないのは当然である。(委員)

< 一般傍聴者との質疑応答 >

河川管理者から説明のあった上下流問題は、事務所間の投資額の問題ではないか。事務所間で指標(人数、資産、堤防延長比等)を決めて、配分すればよいのではないかと思う。(一般傍聴者)

「木津川の上流と下流の事務所で言い争っている」といった話ではない。上下流問題も絡んでいるが、破堤対策を優先するのか、浸水対策を優先するのか、根本的な話だと思っている。(河川管理者)

以上

※発言の詳細については、「議事録」をご覧ください。

開催日時：2002年8月28日（水）13：30～16：45

場 所：石清水八幡宮 青少年文化体育研修センター

参加者数：委員13名（うち1名は部会長の要請により参加）、招聘者4組（5名）

一般傍聴者88名

1 意見交換概要

淀川流域の自治体や消防団、住民の方々4組を招聘し、「中間とりまとめ」の治水関連について概要を報告後、20分ずつ「洪水防御・防災」をテーマとしたご意見をうかがい、委員との意見交換が行われた。

<意見発表者による主な発表内容>

- ・八幡市都市整備部次長 堀口文昭氏：市の主な災害履歴、水害に強いまちづくりなど
- ・八幡市消防団団長 藤本次郎氏：消防団の概要、昭和57年の台風10号による風水害での水防活動体験など
- ・上野市住民 木村公司氏：治水の上下流バランス、上野遊水地、川上ダム、岩倉峡の一部開削の必要性について
- ・上野市土木部部長 辻森孝重氏：水害に対する危機管理、上野遊水地計画を中心とした上野市の治水の歴史と現状など
- ・京都府防災監課長 栗田誠一郎氏：自主防災組織の重要性、治水対策への要望など

<主な意見>

- ・流域委員会の中間とりまとめでは「洪水は不可避で、行政や住民がそれぞれ役割分担を果たしていかなければならない」と提言している。行政は従来の都市計画や治水の考え方を変えていく必要があるのではないか。
- ・行政としては理念転換の必要を感じているが、日々の業務に追われてその発想が出てこない。ハザードマップの作成などソフト面の対応は検討したいが、堤防等のハード面については国にお願いしたい。
- ・当市では以前は農業に携わる人が多かったので、地元の人が消防団（水防団）活動に参加できた。しかし今はサラリーマン家庭、核家族が増えており、団員の高齢化も進み、人員の確保が難しくなっている。
- ・水害防御には、情報の的確な把握、自助・互助・公助による水防などが重要。しかし、洪水の最大の防御は破堤しないことが基本である。
- ・下流の浸水頻度は下がったが、上流は以前と同じで上下流のバランスが崩れている。ダムの整備、狭窄部の開削などの早期着工を。
- ・ダムや堤防など河川整備を進めたとしても、水害を完全に防ぎきれない。いつか安全になるだろうというのは幻想であり、安易に狭窄部の開削はすべきでない。
- ・20～30年後のことを考えた場合、治水に関して自治体や住民も受け身ではいけない。誰もが当事者意識を持つことが重要。

2 一般からの意見聴取

一般傍聴者から「名張川は、上流の青蓮寺ダム、名張市市街地での左岸工事などの整備はすすめられているが、市街地の右岸堤防は未整備。未整備箇所は早急に整備してほしい」との意見があった。

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を参照下さい。

開催日時：2002年9月7日(土) 10:00～12:15

場所：ラポール枚方 4階大研修室

参加者数：委員14名(うち1名は部会長の要請により参加)、委員傍聴1名、
一般傍聴者100名

1 意見交換概要

庶務より「中間とりまとめ」の環境関連について概要を報告後、2人の意見発表者から各20分「環境・水質・生態系」をテーマとしたご意見をうかがい、委員との意見交換を行った。

<意見発表者による主な発表内容>

- ・木津川漁業協同組合組合長 前田伴之氏

木津川上流のダム建設による水質悪化および漁業不振の報告、木津川の浄化など漁協としての取り組み、ダムの選択取水装置設置の必要性など

- ・総合地球環境学研究所 田中拓弥氏

琵琶湖に流入する河川(鴨川、姉川、天野川)の上下流問題、用排水分離による上下流の水ネットワークの分断、上下流の住民の情報交換の必要性など

<主な意見>

- ・ダムにより中小洪水が減少し、高水敷に水がのらなくなり、見たこともない藻が石に付着するようになった。漁協では石を転がすなどしている。(発表者)
- ・既存のダムに選択取水装置の設置を望むが、コスト面で難しい。(発表者)
- ・木津川の漁業問題はダムからの水の流量不足だけでなく、流砂の遮断も一要因といえる。
- ・ダムに堆積した砂が川へ流れ込み、排砂によって全滅した漁場もある。(発表者)
- ・ダムが水を汚したのではなく、根本的には流域住民の生活が原因だ。
- ・農業用水は再利用されているので、上下流のネットワーク細分化はありえない。
- ・圃場整備の用排水分離は、水質汚染問題だけでなく、水路をコンクリートで三面張りにするなど生態系への配慮も抜け落ちている。
- ・鴨川では林道整備工事で赤土が流れこみ、アユの食糧の藻がなくなり、アユが大きく育たなくなったことがある。道路整備やダム工事、或いは農業などが、川にどのような影響を与えるかを調査する必要があるだろう。

2 一般からの意見聴取

一般傍聴者4名から「下流での水不足問題が聞かれる。河川管理者は地域全体の水の使い方を考えていかなければならない」「河川整備は自然を再生する方向で考えてほしい」「上流に木々を植えるなど、水を生む環境整備を考えてほしい」などの発言があった。

このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を参照下さい。

開催日時：2002年9月7日(土) 13:30～16:30

場 所：ラポール枚方 4階大研修室

参加者数：委員14名(うち1名は部会長の要請により参加)、委員傍聴1名、一般傍聴者145名

1 意見交換概要

庶務より「中間とりまとめ」の河川利用関連について概要を報告後、3人の意見発表者から各20分「高水敷利用」をテーマとしたご意見をうかがい、委員との意見交換を行った。

<意見発表者による主な発表内容>

- ・ 日本少年野球連盟 大阪北部大阪都島少年公式野球協会代表 小林恵二氏
グラウンドが、対岸(柴島)の工事の資料を保管するために使用できなくなった。工事が終わっても、また野球場として使いたい。子供たちの未来のために、自然環境とスポーツ利用が共存できるような環境づくりをお願いしたい。
- ・ 淀川ゴルフクラブ(日本ゴルフ場事業協会関西支部理事) 小味淵敦雄氏
都市部においてもレジャー空間は必要である。交通至便な所にあるゴルフ場は、車の運転ができないお年寄り、ジュニア、主婦等にとっては、非常に有益である。
- ・ 枚方市 理事 大橋謙一氏
これまでの河川整備は、施設広場地区を優先的に作られてきたが、まだ手付かずになっている場所も多い。野草地区や自然地区をどう作るかで川の表情は大きく変わる。自然とのふれあいを重視した川作りを期待したい。

<主な意見>

- ・ 工事終了後にグラウンドとして使えるようにするかどうかは、河川管理者が責任をもって決定することだが、流域委員会の中長期的な方針をもとに決定するつもりだ。(河川管理者)
- ・ 不特定多数の人が利用できる場所を、独占利用するのは問題がある。
- ・ 硬式野球という特殊な事情から、街中や学校のグラウンドではまず使用許可が下りない。河川敷が唯一の場所であり、是非使用させてほしい。(発表者)
- ・ 草野球ならともかく、河川敷で本格的な野球をやろうという考え方そのものに問題があると認識してほしい。
- ・ 子供達の事を考えると胸が痛むが、明日ではなく長期的にグラウンドを減らしていく方向だ。
- ・ 川がどうあるべきかという視点で語ってほしい。高水敷は、将来的に緩斜面にして水際を広げたい。その点、ゴルフ場やスポーツ施設はそぐわない。
- ・ 淀川河川敷ゴルフ場は、街に近く便利。逆に何故、淀川ではいけないのか。(発表者)
- ・ 都市行政と河川行政が手を取り合ってやっていくべき。

2 一般からの意見聴取

一般傍聴者4名から「これからの河川整備は自然環境の回復をめざすべき」、「河川敷は、都市部で連続して緑地が残る貴重な場所なので大切に保護してほしい」、「生物や野鳥の環境も大事だが、子供たちの環境についても考えてほしい」、「ゴルフ場は河川公園(野草地区)に含まれているのではないか」などの発言がなされた。

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を参照下さい。

開催日時：2002年9月20日(金) 13:00～16:45

場所：池坊短期大学 地下1階 アッセンブリホール

参加者数：委員14名(うち1名は部会長の要請により参加)、委員傍聴1名、
一般傍聴者112名

1 意見交換概要

庶務より「中間とりまとめ」の水需要関連について概要を報告後、5人の意見発表者から各20分「環境・水質・生態系」をテーマとしたご意見をうかがい、委員との意見交換を行った。

<意見発表者による主な発表内容>

・うどのクラブ 佐川克弘氏

大阪府営水道の需給計画とその問題点など

・京都・雨水利用をすすめる会 安田 勝氏

治水・利水・防災・環境における雨水利用のメリット、京都府・京都市をはじめ行政の雨水利用の取り組みなど

・大阪府中部農と緑の総合事務所所長 岡本康敬氏

淀川左岸用排水管理組合事務局長 石橋三男氏、技術長 木村哲也氏

淀川以南の農業用水の実態、水路の浄化対策、水路使用の展望、水需要管理に対する意見など

<主な意見・意見交換>

・大阪府では水の供給不足を予測し、水を供給する施設整備を計画しているが、予測は東京都のデータから算出したものであり、府では現状の施設で十分供給できる。ダムを建設する必要はなく、水が足りなくなった場合は余剰の工業用水を使えばいい。(発表者)

・雨水利用は内水被害の軽減など治水をはじめ、利水・防災・環境においてもメリットがある。今後は行政、企業、市民が役割分担をしながら雨水利用を普及させてほしい。(発表者)

・雨水はどのくらいの需要を担えるのか。また水需要を考えるにあたって、雨水利用はどう位置付けられるか。

一般家庭では経済的なメリットは少ないが、学校や庁舎などの大規模施設ではメリットが大きい。普及のためにはコストダウンと行政の支援が必要。また雨水利用は、水需要と直接結びつきは少ないと思われるが、水利用についての切り口、水需要予測を考えるファクターの一つといえる。(発表者)

・水需要管理の考え方には総論賛成だが、大阪府のように農地が分散している状況では残存した農地の積み上げがそのまま需要とはならない。

・中間とりまとめに「住民参加」が書かれているが、かつて、小さな農業用水は地域が管理してきた。今後は行政と地域が力を合わせて、美しい水路を効率的に維持するシステムを作るべきだ。(発表者)

・農業用水が少なくなると、家庭排水の影響で水路が臭くなる。川をよみがえらせるような水が流れる農業用水を整備してほしい。

2 一般からの意見聴取

一般傍聴者1名から「琵琶湖では水位低下が深刻で、西の湖では真珠の母貝が死滅している。淀川上流にある琵琶湖の現状も知ってほしい」という発言があった。

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を参照下さい。

第 18 回淀川部会（2002.9.24 開催）結果報告

2002.9.26 庶務発信

開催日時：2002年9月24日（火） 13:30～17:00

場 所：大阪会館 Aホール

参加者数：委員16名（うち1名は部会長の要請により参加）、河川管理者16名、
一般傍聴者122名

1 決定事項

次回の淀川部会は、10月29日（火）午後1時30分より開催。11月13日（水）の拡大委員会に向け、最終提言の内容を検討する。

2 審議の概要

委員会および委員会WGからの報告

資料1-1「委員会ワーキンググループ（WG）について」、資料1-2「委員会および各部会、WGの状況（中間とりまとめ以降）」資料1-3「委員会WG結果概要」をもとに、前回部会以降に開催された委員会や他の部会、委員会WGについて説明が行われ、各WGについて意見交換が行われた。

- ・水位管理WGでの問題は、水需要など他のWGにも提案して検討すべき。WG同士が横のつながりを持ってほしい。（部会長）

最終提言に関する意見交換・河川管理者からの発表

資料2-2「最終提言目次案」、資料2-3「最終提言素案」を検討するにあたり、河川管理者から資料4「繰り返す破堤の輪廻からの脱却」を用いて「壊滅的被害」、「浸水の許容」について説明があり、最終提言（治水について）に関する意見交換が行われた。

- ・発表内容は国土交通省の意見ではなく、淀川工事事務所長の意見である。治水の理念転換は淀川から変えていきたい。（河川管理者）
- ・治水に関する理念転換が何をもちが、中間とりまとめでもWGでも曖昧にされている。多くの人に理解してもらうためにも、明確に表記することが必要。
- ・大きな理念転換をする際には、中小河川との整合性など細部まで短時間につめるのは無理。方向を確認し、課題や今後の進め方を計画の中に盛り込めば良いのではないかと。

一般意見聴取・反映方法について

資料3「これまで実施した意見聴取・反映方法のまとめ」を用いて、現地対話集会の評価・総括、委員会への提言事項について話し合いがあった。

- ・一般意見聴取WGの仕事は、最終提言に一般意見をどう取り入れるか検討することと、河川整備計画を策定、推進する際住民がどう関わるかについて検討することの二つが重要だ。
- ・寄せられた意見をそのまま反映するのは無理。委員が良く読み込み、消化することが必要。

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を、発言の詳細については「議事録」を参照下さい。

第 13 回猪名川部会（2002.8.20 開催）結果概要（暫定版）

庶務作成

開催日時：2002 年 8 月 20 日（火） 10：00～13：30

場 所：a x ビル アクスネット

参加者数：委員 9 名、河川管理者 11 名、一般傍聴者 51 名

1．決定事項

今後の部会のスケジュールについて、以下の通り決定した。

- ・ 9 月 21 日(土)に現地対話集会を行う。招聘者の選定については、部会長及び部会長代理に一任する。
- ・ 第 14 回猪名川部会は 10 月 1 日(火)16:00 より開催する。審議時間は 4 時間を目安とする。
- ・ 第 15 回猪名川部会は、10 月 17 日(木)10:00～13:00 に開催する。

2．審議の概要

第 13 回委員会の報告、委員会WGに関する情報共有

資料 1-1「委員会および他部会の状況(中間とりまとめ以降)」、資料 1-2「今後の流域委員会の進め方について」をもとに、委員会および他部会、各WGの活動状況、スケジュール等について報告が行われた。また、部会長より 8/2(金)開催されたに猪名川部会現地フィールドワークの結果についても報告が行われた。

なお、委員より、全体スケジュールに対して、「期間が短すぎるのでは」との指摘があり、部会長代理より「運営会議に報告したい」との発言があった。

今後の猪名川部会の進め方について

資料 3-1「今後の猪名川部会の進め方について」をもとに、今後のスケジュールについて議論が行われ、上記「1．決定事項」の通り決定された。また、委員より「ダムの問題については早めに議論すべき」との発言があった。

猪名川の治水に関する河川管理者からの情報提供と意見交換

河川管理者より前回部会での要請をうけた情報提供が行われた。

- ・猪名川流域の既往 4 洪水の現況河道における被害状況シミュレーション、および S28 年 9 月洪水規模の 1.2 倍、1.5 倍、1.8 倍、2.0 倍のシミュレーション結果（資料 4-1「猪名川の治水の現状」）

これに対して、部会長代理より、「破堤回避のための堤防強化を行った時のシミュレーションの計算条件等については、整理したうえで再度、河川管理者にお伝えしたい」との発言があった。

河川管理者からの情報提供

委員からの質問に対する回答および情報提供として、以下の説明が行われた。

- ・猪名川流域の水防団の現状について（資料 4-2「猪名川直轄区間の水防団」）
- ・平成 14 年の猪名川流域の濁水状況（資料 6）

一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 1 名から、最終提言に関する質問及び「余野川ダムの問題については早く議論していただきたい」との発言があった。

3. 主な報告と意見交換

今後の猪名川部会の進め方について

庶務より、資料 3-1「今後の猪名川部会の進め方について」を用いて、最終提言の素案の検討スケジュールについて説明が行われた。

(主な意見)

- ・ 神崎川の水質浄化の活動をしている人から「神崎川については何の意見も出ていない」という意見を聞いた。こういった一般意見を検討する機会は、現状ではほとんどない。意見をうかがった限り、何らかの形で反映すべきだと思う。(委員)
- ・ 委員会のWGの検討には、水質の問題を入れてほしい。(委員)
- ・ ダムの問題については「中間とりまとめが終わってから議論する」ということになっていた。現状のスケジュールでは、その時間がとれない。ダムの問題は当部会においても早めに議論したい。部会の回数を増やすことは難しいので、会議を1時間延長する、あるいは会議のスケジュールの見直しも検討すべきだろう。(委員)
- ・ ダムについて議論する時には、水需要の問題を考えねばならない。猪名川については大阪府の水道局の説明だけでは不十分。阪神水道企業団から説明していただくよう要請する。(委員)

猪名川の治水に関する河川管理者からの情報提供と意見交換

資料 4-1「猪名川の治水の現状」、その後資料 4-2「猪名川直轄区間の水防団」、資料 6「平成 14 年の猪名川流域の湧水状況」を用いて、説明がなされた。

* 洪水被害シミュレーション

平成 13 年度現況河道における昭和 28 年 9 月、35 年 8 月、42 年 7 月、58 年 9 月降雨の被害状況のシミュレーション(昭和 28 年 9 月降雨については、1.0 倍、1.2 倍、1.5 倍、1.8 倍、2.0 倍の被害状況シミュレーション)の説明が行われた。

- ・ シミュレーションの結果、浸水常襲地区の銀橋上流多田地区における浸水や無堤地区(川西池田地区)からの拡散型氾濫で尼崎市などの下流が浸水する危険がある。
- ・ 猪名川流域には水防団は存在せず、消防団が任務にあたる。尼崎市の場合は市長が本部長、市の職員が水防団、さらに住民が消防団(機動隊)を結成し、水防活動を行っている。
- ・ 一庫ダムの貯水位等の現況と取水制限の状況が説明された。

(意見交換)

- ・ 既往 4 洪水のうち、S42.7 の被害がとび抜けて大きいのはなぜか。(委員)
集中豪雨がその理由と考えられるが、きちんと解析されているわけではない。(河川管理者)

S42.7の洪水被害の原因が究明されていないとすれば問題だ。4 洪水とも銀橋狭窄部の上流で被害が発生しているが、その対策を考える必要がある。例えば住宅や商業施設の下駄履きなどの対策によって浸水被害を防がなければ、銀橋狭窄部の開削が必要となってくるだろう。しかし、銀橋狭窄部を開削すれば、下流域に危険が高まる。さまざまなことを検討するうえでも、S42.7の洪水被害の原因を究明して頂きたい。(委員)

- ・シミュレーションによれば、S35.8の被害がもっとも甚大だと思われるため、これを基本にした治水対策を考えていく必要がある。(委員)

流域委員会の理念は「いかなる降雨に対しても、破堤による壊滅的被害の回避を優先する」となっている。対象とする雨量を決めて計画流量を流すという従来の治水対策からの転換を提言しているのではなかったか。(河川管理者)

確かにその通りだが、壊滅的被害を防ぐための方法を具体的に考えるためには、一例としてS35.8の被害シミュレーションを取り上げ、想定される被害額と必要な工事費のバランスを考える必要がある。(委員)

- ・自然環境の保護は流域全体で考えなければならない。ダムは局地的な環境破壊をもたらすが、破堤回避のために全川の堤防を強化しつづける河川改修も長期間にわたって環境悪化を招く。ダムによってこれらが回避できるのであれば、結果的にはダムのほうが安く済むのかもしれない。どちらにせよ、判断を下すためには具体的な工事の全容を知る必要がある。(委員)
- ・ダムや堤防の強化以外にも、ライフスタイルの変更やリスクマネジメントといったソフト面での対策を河川整備計画に盛り込んでいくということが、流域委員会の出発点だ。ダムによって、今ある自然は破壊するべきではない。(委員)
- ・このシミュレーションでは想定されていない内水被害も想定すべき。また破堤しにくいすごい堤防をつくった場合には、工事中だけでなく連続性の分断など工事後の環境への影響も考えるべき。(委員)
- ・流域委員会の中間とりまとめには「下流に負荷を及ぼすような工事はしない」とあるが、銀橋狭窄部の掘削、川西池田地区の堤防整備など破堤回避工事が下流に負荷を及ぼすのではないか。(委員)

上流で堤防を高くすれば、下流の流量が増え負荷を与える。だからといって、上流の浸水常襲地帯を放っておくわけにもいかない。(河川管理者)

破堤・越水した箇所では遊水地の機能を発揮させながら、洪水や浸水のスピードを軽減させるような流域全体を視野に入れた仕組みが必要だろう。(委員)

- ・シミュレーションの前提には様々なケースが想定されるため、部会長代理がシナリオを検討した上で次回河川管理者に結果を再度出して頂くこととする。

一般傍聴者からの意見聴取

- ・余野川ダムについては、個別に取り上げて、早く議論して頂きたい。万が一、余野川ダムについて、流域委員会の意見書で触れられなかった場合、どう取り扱われるのか。(一般傍聴者)

まず、余野川ダム事業について河川整備計画原案に、書かなかった場合、書いた

場合の2通りがある。

河川管理者が河川整備計画原案に余野川ダムについて書かなかった場合で、その後の議論を通して作成される河川整備計画原案に対する流域委員会の意見書にも触れられなければ、余野川ダムは河川整備計画に記載されないことになるので、ダム事業は行わないことになる。

河川管理者が河川整備計画原案に余野川ダムについて書いた場合で、その後の議論を通して作成される整備計画原案に対する流域委員会の意見書にも触れられなければ、ダム建設が認められたことになり、ダム事業は行うが、河川整備計画原案に対する流域委員会の意見書に「建設するべきではない」という意見があれば、その意見を最大限尊重して検討する。(河川管理者)

以上

※発言の詳細については、「議事録」をご覧ください。

開催日時：2002年9月21日(土) 13:30~16:45

場 所：川西市商工会館 4階多目的ホール

参加者数：委員10名(うち1名は部会長の要請により参加) 一般傍聴者44名

1 意見交換概要

庶務より「中間とりまとめ」概要を報告した後、3組の意見発表者から各20分間、猪名川に関するご意見をうかがい、委員との意見交換を行った。

<意見発表者による主な発表内容>

止々呂美地域まちづくり協議会 会長 奥村実氏、上止々呂美自治会 会長 酒井精治氏、下止々呂美自治会 会長 塩山慶司氏

止々呂美地域は、当初はダム建設には反対だったが、国・府の強い要望もあり、過疎地域を活性化するまちづくりのため、「ダム湖周辺住宅地開発の早期実現」と「既存集落地区との整合の取れたまちづくり」を条件に基本協定を締結した。しかし、地元の要望は遅々として実現されず、地元を置き去りにした行政の姿勢に不安を抱いている。行政の都合で翻弄されることは決して許されるものではなく、1日も早いまちづくりをお願いしたい。

池田市神田小学校 教諭 西義司氏

猪名川水系に棲むクワガタ虫を描いた「コクワの冒険」という紙芝居を通じて、人と自然の共生について考えた。猪名川の河原はクワガタが住む貴重な場所であり、里山や街を流れる猪名川を人と自然が共生していく場にしていくために、自然にやさしい河原やワンドを作り、魚釣りやカヌー遊びができる川にしてゆくべきだ。

環境川西街づくり協議会 代表理事 管野敬氏、森脇章夫氏

自然はかけがえのないものである。自然環境を基本にした治水・利水を考えていく必要があるのではないか。また、将来にわたってお年寄りや子どもたちが住みよい地域づくりを、行政主導ではなく、ボランティアの手でつくっていかねばならないと思っている。

<主な意見>

- ・余野川ダムがなくても、持続可能なまちづくりは可能ではないか。(委員)
- ・余野川ダム建設予定地は昆虫の宝庫だが、地域の住民の意見も理解できる。人間とダムと自然が共存・共栄するための手段を考えるべき。(発表者)
- ・猪名川になぜクワガタがいるのかわからないが、上流の里山から一気に街に流れ出る川だからかもしれない。
- ・子どもたちの自然離れを危惧している。魅力ある生物を通じて自然を体験してもらう必要がある。(発表者)
- ・自然環境に対する住民の意識や関心の低さが指摘されている。これをボランティアによってサポートしていく方向性を打ち出していかねばよいのではないか。(委員)
- ・人間は河川整備によって水の循環を断ち切ってしまった。川の連続性を取り戻していかなければならない。(発表者)

2 一般からの意見聴取

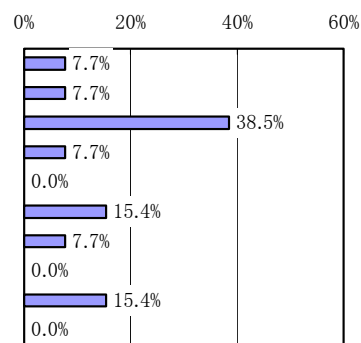
一般傍聴者3名から「猪名川の水質検査が下水処理場の直下で行われている。改善すべきだ」「子どもたちにきれいな川を残すために、魚を通して自然を考えていきたい」、「ダム建設とまちづくりは全く別話である。どうすれば地域発展につながるのか、関係各者がもう一度しっかり協議した方がよいのではないか。」などの発言がなされた。

このお知らせは委員の皆様には主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させて頂くものです。審議の主な内容については「結果概要」を参照下さい。

猪名川部会 現地意見交換会に関するアンケート 集計結果

Q1. この会に参加いただいたきっかけ

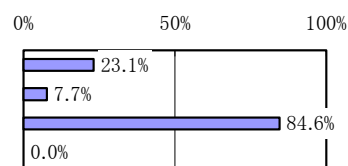
項目	件数	構成比
1 委員から案内された	1	7.7%
2 知人(委員以外)から案内された	1	7.7%
3 行政関係者から案内された	5	38.5%
4 庶務から案内があった(チラシ等)	1	7.7%
5 流域委員会会場でチラシを見た	0	0.0%
6 市役所など公共施設でチラシを見た	2	15.4%
7 新聞で見た(サンケイリビング・京都新聞・その他)	1	7.7%
8 インターネットホームページ	0	0.0%
9 その他	2	15.4%
n 無回答	0	0.0%
回答者数	13	100.0%



Q2. 「現地対話集会」の運営に関する意見

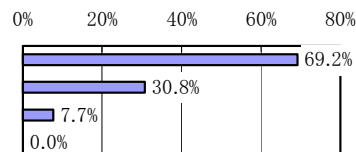
Q2-1. 実施する曜日と時間について(複数回答あり)

項目	件数	構成比
1 平日の昼間がいい	3	23.1%
2 平日の夜がいい	1	7.7%
3 土・日・祝日がいい	11	84.6%
n 無回答	0	0.0%
回答者数	13	100.0%



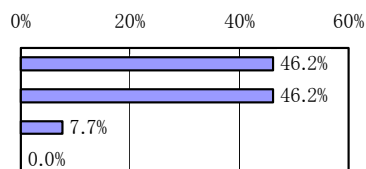
Q2-2. 実施場所について(複数回答あり)

項目	件数	構成比
1 街中の交通の便がよい所がいい	9	69.2%
2 川の近くなど自然に触れあえる所がいい	4	30.8%
3 その他	1	7.7%
n 無回答	0	0.0%
回答者数	13	100.0%



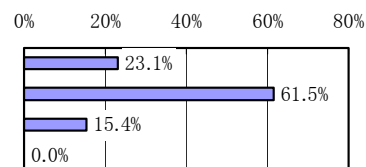
Q2-3. 意見発表者の発言時間について

項目	件数	構成比
1 妥当である	6	46.2%
2 ふつう	6	46.2%
3 不満がある	1	7.7%
n 無回答	0	0.0%
回答者数	13	100.0%



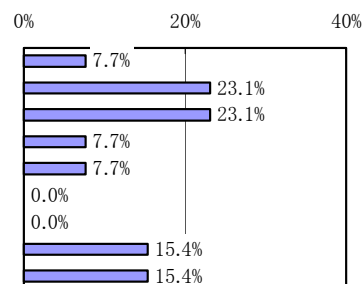
Q2-4. 今回の運営方法について

項目	件数	構成比
1 満足している	3	23.1%
2 ふつう	8	61.5%
3 不満がある	2	15.4%
n 無回答	0	0.0%
回答者数	13	100.0%



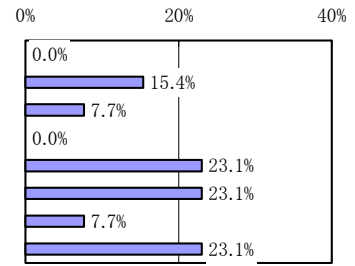
Q5. [職業]

項目	件数	構成比
1 公務員(河川関係者)	1	7.7%
2 公務員(その他)	3	23.1%
3 NPO関係者	3	23.1%
4 会社員・会社役員	1	7.7%
5 自営業	1	7.7%
6 学生	0	0.0%
7 主婦	0	0.0%
8 その他	2	15.4%
n 無回答	2	15.4%
回答者数	13	100.0%



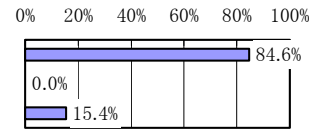
Q5. [年齢]

	項目	件数	構成比
1	20歳以下	0	0.0%
2	21～30歳	2	15.4%
3	31～40歳	1	7.7%
4	41～50歳	0	0.0%
5	51～60歳	3	23.1%
6	61～70歳	3	23.1%
7	71歳以上	1	7.7%
n	無回答	3	23.1%
	回答者数	13	100.0%



Q6. 今後このような会がある場合、参加したいか

	項目	件数	構成比
1	是非参加したい	11	84.6%
2	参加したいと思わない	0	0.0%
n	無回答	2	15.4%
	回答者数	13	100.0%



Q1. 本日、この会に参加いただいたきっかけは？
9 その他
地域活動(環境にやさしい街づくり推進会)
商工会議所

Q2-2. 実施場所について
特にこだわらない
出来れば川の近く

Q2-3. 意見発表者の発言時間について
15分
・20分
・より多くの人が発言出来る様。独演会は不要

Q2-4. 会の運営方法について
<ul style="list-style-type: none"> ・一つの発表につき、委員の意見のあと一般の意見もとればいいのではないか。 ・あと何故、環境ありきな委員にかたよっているのか？この部会の根本的問題として大いなる疑問である。 ・一人20分の発言なのに何故3番目のところだけ特別扱いするのか！ ・部会長の進め方から3番目の団体に気を使っているような気がした。(話が長くなるのがよめている)何故えんえんと40分もしゃべらすのか。 ・一般傍聴も環境団体の関係者だらけ。 ・過疎化に悩んでいるという止々呂美の意見が打ち消される。(最後にもってこれなかったのか)
川を楽しむための 川づくりが必要である
私たちがプロジェクトチームを作り、猪名川について取り組んでいます。川に親しめ、共生できる川づくりについてお互いに考えていけたら良いと思っています。
もう少し、回数を重ねてから、述べさせていただきます。
<ol style="list-style-type: none"> 1. 発言の意志を受付に申し出る→進行の組立ができる 2. 長くなりそうな人には「鈴」「ジェスチャー」で切り上げてもらうようにする。(過去・現状・取り組むの3パートで話してもらうように事前整理をお願いする)

Q3. 猪名川のこれからの川づくりについて、ご意見・ご提案があれば、お聞かせ下さい。
昨年度の日本の河川の汚染度ベストテンに10年以上前からあも変わらずNo.2～No.3とのこと。市・県に汚水度たずねると判らん、豊中広域下水処理現場の排水付近ではかったものという。それならどうするかと質問しても解答出来ない。必要なら改善策があつて良いのではないか。
川は親しむもつとであると同時に恐いものであるということをもつと知つて欲しいと思います。堤防のすぐ近く迄宅地開発されているのを見ると恐ろしいです。
上下流の住民が一緒になつた取組みが出来ると環境必要であると思いますが、このことは国・県・市町のつながるフレームの強化する必要があります。
環境・環境・環境... ありきな意見のみですすめていくのは大変疑問である。そういった団体が活動しているだけであつて、一般の人はそれだけを思っているわけではないということをもつと考えるべきである。
<ul style="list-style-type: none"> ・余野川ダムと止々呂美の町づくりは別々に議論すべきである。 ・余野川ダムがなくても止々呂美の復興は出来る。知恵と努力がある。 ・余野川ダムは中止するべき、余野川、猪名川の生物多様性を維持すべき。
<ul style="list-style-type: none"> ・簡潔にまとめられていると思います。 ・あなたはどう思いますか？という問いかけで終わっていますが、簡単に取り組める“お願い”的な所も盛り込んだらよかつたのではないのでしょうか？
<ul style="list-style-type: none"> ・水資源保護条例 等法のバックアップが必要 ・森下郁子氏とのディベートを望みます

Q4. 資料1「流域委員会からのメッセージ」(パンフレット)についての意見、感想をお聞かせ下さい。
ありがとうございます がんばつて下さい 結構です
大阪の水資源として琵琶湖・淀川水系をもつと理解し大切にすべきだ。水質汚染、水質環境、水資源確保、水危機をどう克服すべきかが21世紀の近畿の最大の問題である。雨水の利用、降水量の増大も図るべき、蒸発量の増大を図る自然回復が是非とも必要である。
第1回目としては本当にご苦勞様でした。「メッセージ」を送付下さい。